
猫神

角野のろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫神

【Nコード】

N3949A

【作者名】

角野のろ

【あらすじ】

「貴様……ワシが九度目の死に所を見たな？」時は夕暮れ、猫飼修治は謎の少女との出会いを通じて、非日常の世界へと足を踏み入れていく。それまで知らなかったモノ。“何か”が起こす奇妙な現象の数々。彼らの学校生活を綴る奇天烈ストーリー。

序ノ一（前書き）

執筆速度は作者名の通りですが、最後までお付き合い戴ければ幸いです。

序ノ一

俺は今、窮地に立たされていた。睨まれている。眼前にいるのは明らかな憤怒の表情を向ける少女。その背丈は俺の首辺りに辛うじて届くかというくらい。不自然な緑に光る瞳が送る鋭い視線。ふわり、と流れる長い黒髪。

俺が果たして何をしたというのか。一体全体どういった理由で睨まれねばならないのか。

無言の問い掛けに対し、彼女はこう返す。

「貴様……ワシが九度目の死に所を見たな」

俺は始め、彼女が何のことを言っているのか、全く分からなかった。

しかし、その言葉の意味を理解した時、俺の日常は非日常へと変化していった。

その始まりは夕暮れ時。そよ風がまたたびを散らしていく……

序ノ二

カーテン越しに陽光が入ってくる。目蓋を通して眼球に当たる日光が異様に眩しく、思わず呻き声を上げてしまう。

俺はベッドの中で目を覚ました。

「朝か……」

鼻孔に微かな甘い匂いが漂ってくる。おそらくトーストに染みたまぐさの香りと蜂蜜の香りだろう。寝ている間に空になった腹が欲望を刺激され、分かりやすい陳腐な音を催す。それ以外鳴らないのもまた忠実で良いことではあるのだが。

「腹……減ったな」

体を無理に起こし、枕元に掛けておいた制服に着替える。まだ頭がぼんやりとしている。今は何時だ？

七時三十分。学校に行かねばならないその時まで、まだたっぷり一時間と三十分は余裕がある。

「おはよう」

「あら、おはよう、修治。今日は随分と起きるのが早いねえ」
階段を降り、母の理沙に挨拶をしてからテーブルに付く。早朝のニュースを見ながら、ゆっくりと朝食を摂る。

こんがりとした狐色に焼けたフレンチトースト。オーソドックスだが、朝食としてはまずまず。インスタントコーヒーにもお湯を注ぐ。

「そうそう、今日は宗道^{そうどう}くん、迎えに来るの？」

理沙が友人の名前を口にする。

「ああ、そういえば、そんなこと言ってたような……」

記憶の片隅から捜し始める。

同じ地元の学校に受験し、無事に合格。その合格発表の掲示を見た直後。不安な気持ちに安堵と喜びに転化し、胸に溢れている状態。その時、栄ちゃんは一言、

「近所なんだし、どうせなら一緒に行こうよ」

このように、誘ったのである。

そこまですを思い出した所で、鳴るチャイムの音。まさに示し合わせたかのようなタイミング。玄関まで行くとそこには前言通り、友人がいた。

「おはよう、修治くん」

にっこりとはにかみながら、彼、宗道栄徳そうどう えいとくは俺に挨拶する。小柄で華奢な割に大きな声。

鼻先に掛けた眼鏡のおかげか、知的な印象を受ける。そのガラス越しにある大きめの瞳はキラキラと輝いていた。

「おーす、栄ちゃん」

そう、彼のあだ名は栄ちゃんである。宗道栄徳という古めかしいのか斬新なのかよく分からない名前。どうにも呼び辛かったため、いつの頃からか、中学では簡単にそう呼ばれるようになっていた。

彼とは幼稚園以来の幼なじみであり、小学校と中学校も同じだったからもう、十二年ほどの付き合いになるだろうか。家が近いこともあり、お互いの了承を経てよく一緒に学校に行くようにしていた。その習慣は高校に入っても変えるつもりはないらしい。

「今日から高校初登校だよー」

俺は壁掛け時計を確かめる。八時十分。まだ十分に余裕があることを認知すると、

「おう、早速ですまんのだがもうちょい待って貰えるか？」

栄ちゃんに待ち時間延長の許可を申請。

「うん、いいよー」

ウキウキ笑顔を崩さずに栄ちゃんは了承する。

「悪いな」

そんな気のいい友人に感謝しつつ、俺は身嗜みを整える。慌てて歯磨きをし、髪も整える。そして、準備を完了した所で、待たせた友人に詫びをいれる。

「よし、そんじゃ行くか！」

「うん！ 高校ではどんなことがあるのかなー」

こうして、俺たち二人は学校に向かうのだった。

今日から通うことになる怪思^{あやし}之高校は長い坂を登った、更にその先の山中にあった。歴史は古いらしいが一体何時の何年に建立されたのかは知らない。

近くにもう一つ別の高校もあったのだが、そこは何となく雰囲気が入らなかったので止めた。受験時に万が一落ちない方を選んだというシヨボい理由もあったりはするのだが。

「同じクラスだいいねー」

スタスタ歩を進めながら栄ちゃん、こと宗道栄徳が話し掛けてくる。俺はどちらかというと、歩きながら話すのが面倒だったりするので時々、話半分に相槌を打っている。

「あ、そーだ！ 修治くんはさ、この学校って色々怪しい噂があるのって知ってる？」

「ん、ああ、あれだろ？ 真夜中に音楽室に行くとベートーベンの肖像がペロリと舌を出したりするとかいう」

「舌を出すのはヨハン・シュトラウスじゃなかったっけ……って、それはどうでもいいけど、学校の七不思議だねー」

「どこの学校にもあるもんじゃないのか？」

俺が尋ねると、

「んー、まあそれはそうなんだけど、ここには別の……そう、他の不思議もあったりするみたいなんだよねー」

「なんだそりゃ」

こいつは昔からそうだった。妖怪とか幽霊とか、そういった魔化不思議なモノに興味を惹かれるのだ。頭が良い癖にそんな話ばかりするので密かに付いた称号がこれ、オカルト博士。

「へー、そんなあだ名が付いてたんだー。何か嬉しい」

そうだろうな。公に自らを妖怪オタクと自負していたくらいだから。

「あ、もう学校だね」

話している内にふと、気が付くともうそこは校舎前だった。左右に無駄に立派な石の柱がそびえ、金属製の門を固定している。まるで優秀な門番のようだ。

「さて、それじゃあ同じクラスであることを願って」

「ああ、せいぜい神にでも祈っとく」

神様なんてモノが実際に存在するかは疑問が残る。だが、何もしないよりはマシだろうさ。

俺と栄ちゃんはこのような会話をして校門をくぐる。

校舎はコンクリートで作られた、一般的な白塗りで中央には時計塔。そのすぐ隣には何故なのか、現在の校舎よりも立派に見える、旧校舎が顕在である。

その他は山の中にあるということ以外、本当に平凡な、何もない普通の学校。

そう思っていた、アイツに出会うまでは。

序ノ二（後書き）

題名にある、猫神の登場までは、まだしばらく掛かる予感がします。完結は何時頃になるかは分かりませんが、なるべく頑張りたいと思いますのでよろしくお願いします。

序ノ三（前書き）

長い黒髪の少女が登場します。ほとんど後ろ姿だけですが、彼女の正体は一体……？

序ノ三

教室に入ってから、数分。

俺は今、クラスメイトと共に担任となる男性教師の話を聞いている。
ホームルーム HRという奴である。

新調のスーツに有り余るエネルギーを貯蔵した、見た目はさわやか好青年。話し方もやけにハキハキしていて、非の打ち所がない新米教師。

学校生活に精神を毒される前の数少ない良心だろう。彼に幸多からんことを。

一通りに五人ずつ、六列並ぶ所の真ん中、その左側の四番目が俺の席だった。希望は窓側だったが、まあ仕方ない、二学期に期待しよう。

そんなことを考えて、軽いため息を吐く俺の斜め後ろには栄ちゃんが着席。無言の笑顔光線を放っている。

もしかすると神様はいるのかも知れないな。いや、実際、祈ったりはしてないのでクラスが一緒になったことはただの偶然だろうが。「よし、みんなちゃんと席に着いてるな。俺はこれから君たちの担任になる赤松、赤松聡だ」

黒板のど真ん中に大きな文字を書いて、

「担当は国語、現代文を教えることになるが、実は現代文よりは古典の方が好きだ」

更に続けて、

「でも古典は佐藤先生が教えてるみたいだからなー、何れは後釜を狙っちゃおうかな、なんて考えてたりする。あ、これ佐藤先生には内緒ね」

一応、彼なりのギャグなのであろう。周りに合わせて、俺もとりあえず失笑しておく。

「今年から本当に教師になった訳だから、一生懸命頑張ろうと思っ

てる。だからみんなも文化祭やらクラスマッチなんかではバリバリ活躍してくれよな！」

ばっちり、親指を立てる。……。

ある意味において、凄まじく微妙な空間が形成された所で、

「さて、俺の自分紹介も一通り終えたから今度は君たちの番。廊下側から順に自己紹介していつてくれるかなー？」

赤松先生の話は進み、こうして、緊張の一瞬が始まる。

自分の名前と昔いた中学校名、それにある者は好きな音楽、食べ物、芸能人などをプラスαで紹介していく。

更に、その内の何人かは一発ギャグなんぞをして教室の室内温度を地味に下げる。

俺も事前に準備していた言葉を心の中で反復し始めた。

「僕は宗道栄徳、出身校はまたたび中学です。中学では栄ちゃんと呼ばれてました、趣味はこの世ならざる魔化不思議なもの、つまりオカルトなんかが大好きです。だからみんなも僕のことをオカルト博士って呼んで下さい！」

言い切った顔をして、栄ちゃんは席に着く。

流石だよ、周囲はどっ引きだぜ。それでも、裏表のない性格とあの悪意のない笑顔に惹かれてしまう。何れはみんなからもクラスの一員に認められるだろう。いや、間違いなくそうなる。

何故断言できるかって？ それは小学校と中学校がそうだったからという理由に他ならない。それだけの人間的魅力が栄ちゃんにはあるのだ……と、誰かが言っていた。

とはいえ、便乗して自分を明かそうという勇氣ある者はなく、その後は当たり障りのない自己紹介が続いた。

俺の番まで、あと二人……一人。

しかし、その一人、俺の目の前の少女が声を発した時、それまで頭の中で用意していたボキャブラリーは全て消失した。

さかき もみじ

「榊紅葉です。出身校は緑ヶ崎中学、趣味は本を読むことです」

自己紹介自体は至極、平凡だった。ちよつと大人しめな優等生と

いった様子。だが、それだけではない何かを俺は一瞬に感じ取った。長めの黒髪に、きちんと整えて着こなした制服。場所的には後ろ姿しか見えない。

が、その声には深みのような、ある種の鮮烈さを伴っているように感じた。

何故、そんなことを思ったのだろう。たかが、自己紹介に過ぎないのに。

唐突に生まれたその疑問に対する答えを俺は持ち合わせていない。悩んでいる内に、彼女が座ったことにも、俺は全く気が付かなかった。

「あれ、次は？」

赤松先生の声に我を思い出すと、時、既に遅し。クラスメイトたちが俺を、不審気な目で見ていた。

慌てて、立ち上がる。

「おおおお俺は……猫飼修治！ ええと――」

（クソッ、しくじった！）

周りのある一人が吹き出すと、それに釣られてまた一人、また一人というように。しまいにはクラス全員の笑いを買うことになってしまった。

栄ちゃんまでもがいつもの無邪気なだけの笑顔ではない、嘲笑の目で俺を見ている気がする。呪われてしまえ。

右手を石の形に握り、それを口元に当てて榊さんも笑っていた。抑えようとして押し殺した笑い、には違いないのだが、何やら無償に腹が立つ。

「……よろしくっスー」

頭を掻きながらトボトボと座る俺に掛かる、笑いの嵐。それはしばらく納まりそうになかった。

序ノ四

H R が終わり、羞恥心を煽る精神的拷問タイムからは解放される。あの後、俺はすぐにあれこれとフォローをして、何とかその場の雰囲気を纏めた。

けれども、この気分の落ち込みを持ちなおすには、少なくとも三分カップラーメンが六十杯出来るだけの期間……つまり、三時間を超える時が必要だった。

最近は一分ラーメンなどというものもあるらしい。

「修治くん、大丈夫ー？」

このように、途中も栄ちゃんが話し掛けてくれたりはしたのだが、どこか悔しくて無視する。

ここまで素直な自分に泣きたいね、本当に。

そんな俺の気持ちなどは一切無視で、授業は淡々と進行していく。次回の教科内容で必要になる道具、自らの趣味を教師たちは紹介する。

毎度お馴染みの行為に、生徒もそろそろ飽きてくる頃合い。

その時くらいになって、ようやく俺の気分は鬱状態から脱出した。

「えーと、もう大丈夫？」

問い掛ける栄ちゃん。

「お、おう……さっきは悪かったな」

「仕方ないよ、運が悪かったんでしょ」

こんな感じで栄ちゃんは優しく声を掛ける。全くいい奴だねえ。

微妙に目と口元がプルプルしてるのが気になるが。

「ふふっ、バレちゃった？　だって、あの時の修治くんのテンパりっぷりと言ったらもう——」

頼む、それ以上言わないでくれ。でないと、本気で殴ってしまいたいそうだな。それとも何か？

貴様はサディスティックマゾヒズムオールOK野郎なのか？

「くっくっ……苦しいよ、修治くん」

胸ぐらを掴まれて顔色が青くなる宗道栄徳。血流が止まり、次第に顔面は蒼白になっていく。

彼が黄泉へ落ちる一歩手前で俺は手を離れた。

「けほっけほっ……」

このように俺と栄ちゃんは仲が良い。

「それで、七不思議の方は何か進展はあったのか？」

大して興味はなかったが、一応聞いてみる。

すると、栄ちゃんは目を輝かせて、

「凄いよ凄いよ、大収穫。色々ありすぎてどれから手を付けたらいいか分からないくらい！」

もう少して、歌って踊りだしそうである。

「ほお」

「まずは最新情報、音楽室で舌を出すっていうのはベートーベンでもヨハン・シュトラウスでもなくて第三人物。何と、ミケランジェロだったんだ！」

「ふむふむ」

「……あれ、何でミケランジェロが音楽室にあるんだ？ とか、ミケランジェロって普通は美術室にあるんじゃないかなかったっけ？ とかの、ツツコミは？」

「へえ」

「……あのさ、ちゃんと聞いてる？」

すまん、ばれちまったか。

大体な、俺にはそういう非異論理的な事柄に真面目に答えるような奴がたくさんいるとは思えない。きっと、ほとんどの情報が冗談か野次馬の紛い物だと思うぞ。

「うーん、なるほど、そういう考えもあるかもね……でも！ そういった嘘情報にも真実はあるはず。その真実を見出だすところがこの僕、オカルトハンターに課せられた使命なんだ！」

このように、断言する栄ちゃん。

称号が変わっていることには取えてツッコまない。

もし、このまま付き合っていたら、俺もいつか同じようになってしまっているのか。そんな、一縷の不安はよぎる。

しかしながら、今まで一緒にいてもほとんど変化はなかった。そのため、心配するほどのことでもない、ように思える。

「それで、話の続きなんだけどーほら、今日学校に来る時に話してた、あの七不思議以外の不思議って奴」

「ああ、そんなことも言ってたかもな……で、それがどうした？」

「その不思議の詳細が分かったんだよ、ある所から情報を仕入れてきてね、僕の知らなかったネタも豊富でさ、かなり興味深かったんだ。オカルト魂を揺さ振るっていうか、信仰を強めるっていうかー」

「回りくどいこと言ってるんで、早く本筋に入れよ」

俺がそうやって急かすと、

「まあまあ、すぐに説明するから」

ようやく本題に入った。

「地方神猫神伝説」

……なんだそりゃ。

「ネコガミ伝説……？」

「あれ、聞いたことない？ 猫神伝説、猫の神様のこと」

いや、意味自体は何となく分かる。だが、そういうことじゃなくてだな。

「何十年も何百年も生きた猫が変わると言われてる異能を持つ猫――」

その場合は猫神とは言わなくて、猫又と呼ぶんじゃないか？

「戌神があるんだから、細かいことは気にしたら駄目だよ」

「そういうものなのか……」

「うん！」

何故か、言い包められてしまった感が強い。

戌神というのは名前の通り、戌の神様。人間にはそれに代々憑かれた物、戌神一族というものがあり、場合によっては憑き物筋とも言われる。

地方で伝わる話は善霊だったり、悪霊だったりするので確かな話とは分らない。

中学時代、俺は栄ちゃんに、延々とそんな話をされたため、ほとんど覚えてしまったのだ。

これは今の人格形成にもきっと作用している気がするため、あまり誉めたものとは思えない。

いや、よく思い出すと戌に似た動物霊だったか？ まあ、どうでもいい。

「その猫神が生まれる時期があるらしくてね、初耳だったんだけど」
ほお、栄ちゃんが初耳とは相当の物だな。俄然興味が湧いてくるぜ。

無論、冗談だが。

「それが何と今年なんだって」

……そんなピンポイントなこと、どうやって知るんだよ。間違いないく嘘だな。

「大体、そんな嘘臭い話、誰が言ったんだ？」

すると、栄ちゃんは不敵な笑みを浮かべて、一言。

「榊さん」

「俺の前の……アイツか？」

小声で問い掛けると、

「そう」

と、栄ちゃん。

「……そういう話、好きな奴だったのか？」

「うんにゃ、そういう訳じゃなくて聞かれたから答えただけ、そんな感じだったよ。だからさ、あんまり深くは尋ねなかったけどねー」
「ふん」

どんな奴なのか分からなくなってきたな、榊紅葉。

果たして、不思議キャラか単なる冷やかしか。後で調査の必要がありそうだ。

こんな風にして時間は過ぎ、そして、放課後になった。

序ノ四（後書き）

次話からようやく話が動いていく予定です。とはいえ、しばらくのまったりムードは変わらないかも……。最後までお付き合いいただければ幸いです。

序ノ五

帰り道、栄ちゃんとは途中の道で別れた。

そして、このままそれぞれの家に向かう。

時間は暮れ六つ。人通りに自分以外に姿はなかった。

道の横に生えるまたたびがふわり、とお辞儀をするように揺れる。

「榊紅葉……」

一体、何だというのか。俺の心を捉えて離さない、この不思議な気持ち。

まさか、一目惚れって奴か？　ありえない。姿をすっかり見た訳でもないのに……。

ぼんやりと、そんなことばかりを考えていた。

そのために、四輪を駆動させる鉄の悪魔の接近にも、俺は気付かなかった。いや、気付くのに遅れた。

そして、気付いた時にはもう間に合わなかった。

目前に迫る、大型トラック。

もし、あれに当てられたとしたら一溜りもないだろう。

それを稼働させる運転手は進む先に、俺がいることをまだ知らないようだった。

叫び声を上げる暇もない。

俺はこのまま死ぬのか。何とも虚しい、下らない、情けない、十五年の人生。

最後に思い浮かんだのは、家族の顔でも、榊さんの後ろ姿でもなく、何故かオカルトを楽しげに語る栄ちゃん的笑顔だった。

（マジかよ……。）

パンッ。

思ったより、小さな炸裂音。そして、後にグシャリと何かが潰れるような音が続いた。

(……あれ?)

というか、俺は何故こんなにも冷静に音なんて聞いていられるんだ?

確か轢かれた当人のはずなのに。

体を起こそうとすると、左半身に鈍い痛みが走った。

しかし、思ったより酷くない。何というか、思い切り突き飛ばされた時のあの感じに似ている。

見回すと、俺がいたのは道端で、そこにはまたたびの群集が近くに生えている。

つまり、轢かれたはずの場所からそれほど離れてはいない。けれども、一瞬で移動するには不可能な位置。

慌てて道路の方を見る。すると、そこには。

猫の死体があった。

黒い、美しい毛並みの老猫。首輪は付いていないので、野良猫だろうか。

今や、血に塗れた無残な姿に変わったとはいえ、その漆黒の老猫は長い年功に伴った威厳を、未だそこに留めていた。

「……まさか、俺の身代わりになってくれた……のか?」

名も知れぬ、野良猫。

与えた恩義などない、と思う。それなのに身を呈して庇ってくれたのか。

足をゆっくりと踏み出す。自分の不注意によって起きた悲劇を知る。何とも、居たたまれない気持ちになる。

「悪い……、俺が、考え事なんてしてなければ——お前は今も生きていたはずなのに——」

両の掌を合わせて目を瞑る。お経の文句は知らないので、心の中で南無阿弥陀仏と唱えた。

「……見たな」

その時、背後から声がした。聞く者を捉えるような鮮烈な声色。慌てて振り返ると、そこには長い黒髪の少女がいた。

「榊……さん？」

（いや、違う）

瞬間的に、それが榊さんではないことが分かった。

身に纏うのは、改造した和服のような全身黒衣の姿。その下に穿くのも袴に近い物だ。

背丈は俺の首辺りに辛うじて届くというくらい（確か、榊さんは俺と同じくらいか、もう少し背が高かった）。

緑色に光る瞳が放つ、剣山のような鋭さ。

まるで、自分の全てを審美眼で見定められているような違和感に、俺は戦慄する。

憤怒の表情を向けたまま、少女は威厳のある深みを持った声で言う。

「貴様……ワシが九度目の死に所を見たな」

「お前は……誰だ？」

浮かんでくる、当然の疑問。

すると、少女の表情はますます、ムツとしたものに変わる。

「貴様……ワシが、何者か分からぬのか？ このワシに命を救われたというに」

……コイツは一体、何を言っているのか。俺はお前に助けられた覚えなんか――。

（ハッ……!?!?）

その時、少女に感じたもう一つの違和を発見する。

長い黒髪の間から生える、二つの突起を。それは通常、人間が持つはずのないもの。

動物の耳。

黒髪に紛れて分からなかったが、よくよく見れば、そこには、確かに存在した。

身近にペットとして飼われるような哺乳動物が持つ、ふわふわとしたビロードの毛並みの耳。色は髪と同じ、漆黑だった。

「——やっと解したか。ワシは猫神、猫神ねこがみ こんざえもん権左衛門」
少女は、そう名乗った。

「権左衛門……」

そして、彼女はそのまま言葉を繋いでいく。

「ワシはずっと待ち侘びてきた——九つの命を生き、天上界へ行くことを」

猫は九つの命を持つと聞いたことがある。どうやら、本当のようだ。

「時代を越え、各地を転々とし、ワシは悠久の流れを見てきた……。

それも全ては神が暮らすと言われる、天上界へ行くため」

猫耳の少女は恍惚したように、しばらく空を見上げる。

だが、次には、俺の方に鋭い眼光を向け直し、

「しかし、全て貴様のせいでその計画は潰れた！」

……何？ 俺のせいだと？ 一体、どうして——。

「まず、ワシが貴様を救うことは必然だった。天に行くには生前に善行をすることが必要じゃからな」

「それは……何となく分かる」

「だが、猫にはそれ以外にもう一つの約束、ルールがあったのじゃ。死に場所を他人に見られてはならぬという——」

そうか、それでコイツは俺のことを睨んでいたのか。

「……つまりはこういうことか？ お前は目的に合った逸材が現れることをずっと待っていた、助けを必要とし、それを求める者を。だが、予定通りには行かなかった。俺がお前を見たから。助けたのは目的のため、けれど、そのせいでお前は天上界に行けなくなった。だからお前は俺のことを怒っている」

「そうじゃ」

「そんなの自分の勝手にやったことでキレてる、単なる八つ当たりじやねえか！」

当然のように頷く権左衛門に、俺は激昂した。

「五月蠅い、黙らぬと呪うぞ！」

全く無茶苦茶だぜ。

「あんな、命を助けてくれたのには感謝しよう。だがな、俺にいきなりキレるのは見当違いってもんだと思うぞ？」

「フン、誰も貴様の考えなど聞いておらぬわ。自分を中心に世界は回っておる、それがワシ基盤じゃ」

天上天下唯我独尊、とことんいらつく野郎だ。いや、女か？

「……だが、ワシが天上界に行く方法はまだ辛うじて残っておる」

権左衛門はすると、キセルから吸った煙を吐くように溜息をする。

「貴様、名は何と申す」

「……名前？」

「早くせい、でないと——」

「わ、分かった！　言う、言うから落ち着け」

怪しげな目の光を、強め始めた猫神に俺は慌てて答える。

「俺は、猫飼修治！」

ああ、クラスの自己紹介もこれだけ上手く言えてたらな……。

そんな、俺の気持ちなど露知らず、権左衛門は、

「ほう、猫飼家の者か……不幸中の幸いと言った所じゃな——」

一人で何事かブツブツと呟き出す。

「よし、お主にはこれからワシの手助けをして貰うでしょう」

二、三本だろうか、美しい髪を一房抜き、

「腕を貸せ」

そう言ってきた。

俺は右腕を躊躇いなく出そうとしたが、しばし考える。利き腕をこんな簡単に差し出して、良いものか？

相手は猫神という、正体も訳分からぬ存在。出した腕に何をされ

るかも知れたものではない。

まさか、天上界に行くには見た者の血と肉を生け贄にしなきゃならないとか、そういう奴か？

「どうした、早くせい」

権左衛門が迫る。背水の陣、万事休す。

仕方ないので、まだどちらかと言えば使う率の少ない、左腕を差し出した。

「よし、それでよい」

猫神はニンマリと笑みを浮かべる。そして、差し出した左腕の上に先ほど抜いた髪の毛を載せた。

そして、目を瞑り、呪文のような物を唱える。

「神よ。ワシが名は権左衛門……今、我が一部を相手に与え、その約束を果たさんとす——」

すると、髪が生命を持ったように腕の上で蠢いた。更に熱を帯び始める。

「——相手の名は修治、猫飼家の子。制約により約束を果たすべく——」

熱い、熱い、熱い……。全身の血が逆流しているような奇妙な感覚。

「今、ここで！ これにて、ワシと修治の盟約は結ばれた！」

急速に髪から熱が失われていく。まだ左腕が疼いている。

「これは……一体？」

気が付くと、腕に巻かれた髪はミサングのような深緑色の紐に変わっていた。感触は絹に近い。

「契約の証、そう、強いて言うなら猫紐じゃな」

「なるほど、猫紐か……って、ちよつと待った！ その前に何だ、契約って！」

「そのままの意味じゃ。主には、これからワシが天上界に行くための手助けをしてもらう」

俺が予定していた、学校での普通の高校生活。しかし、このまま

では前途多難なものになりそうだった。それは俺の前にいる、この門左衛門が無言で約束しているかのように思えた。

序ノ五（後書き）

ようやく、これの題名でもある猫神様を登場させることができた。やっところさ、土台が完成かな？ 後はこれをガシガシと踏み固めて、色々な話を紡いでいけたら、と思っております。遅筆家ではありますが何卒、何卒……。。

序ノ六

俺は一つ。高校に入る前にたった一つだけ、ある目標を立てていた。

それはあくまで目立たず、騒ぎを起こさず、完全無欠、普通の高校生活をエンジョイする、ということ。

誰とでも話が出来、その上に数人の親友がある状態を目標に。

また、いざという時には役に立って、へー、コイツ意外に凄い奴じゃん。そう周りに思ってもらうこと。

彼女まではいかずとも、仲のいい女友達も何人かは欲しい。

クラス行事以外にも、学校でなければ経験出来ない青春フラグを一通りは立てておきたい。

出だしの自己紹介では若干失敗した。

しかし、これは失敗の部類でも比較的小さい方。まだ幾らでも修正は可能だろう。

これからの行い次第でどうにでもなるはず……。

そう考えていた。

だが、これは一体どういう訳だ？

学校帰り、いきなり大型トラックに挽かれそうになって、死にかけた。辛うじてその時は、九死に一生を得る。

けれども、俺が死ななかったのは黒い野良猫が身代わりになってくれたからであって、その犠牲の賜物。

ソイツには本当に、悪い事をしたと思った。

しかし、野良猫の正体は何十、何百年の時代を生きてきた猫神――とかいう訳の分からん奴だった。

しかも、今まで九つの命を生きてきたなんて途方も無い話（人間の姿になった時に名前は権左衛門とか、言っていた）。

そもそも俺を助けたのは老いた猫に生まれた咄嗟の優しさ、などではなく、ある目的を果たすためだったらしい。

ところが、ちょっとした不手際があり、その目的は破綻する。

猫神とかいうソイツは、原因がお前にあるのだから手助けをしろ、と理不尽な要求を叩きつけてきた。

断ろうとすれば、今度は呪ってやる、と戯言を抜かしやがる。有無を言わせぬやり口。

ふざけんじゃねえ！　こっちはこっちで、言い分があるってもんだ。

命を救ってくれたのは感謝するが、それはそれ、これはこれ。

もう一度言っておく。ふざけんじゃねえ！

何もかも自分の思い通りに行くなんて考えるなよ。精々あがいてやる……

……と、ここまでが今、現在、俺が置かれている状況ということになる。

化け猫、権左衛門（今は人間の姿をしている）は、焦燥に浸る俺を半ば無視し、こんな要求をしてきた。

「ワシには契約者が住む場所を知る必要がある。まったくの不本意ではあるのだが、仕方あるまい。今すぐにお主の家へ案内しろ」

それについては少し考えたい、と返答したかった。

だがあいにく、俺にはそれを断るだけの切り札と言えるものがない。

下手に断ると呪われることは既に確定済みの要素だ。俺はわざわざそんなリスクを負う必要もない、そう判断した。

だから、

「……分かった」

このように、簡単に答える。

そして、尻尾と猫の耳を持った、傍から見れば何かのコスプレを

しているかのように見えなくもない猫神を、人目を気にしつつ家へと連れてくる。

とりあえず、部屋に上がらせたまではよかったのだが……。

「狭い家じゃのう……まあ、よい。我慢してやろう。して、湯浴み場はどこじゃ？ 汚れを払わせよ。ワシはお主を助けたがために、身が汚れておる」

この毒舌には正直ビビった。

人様の家に勝手に上がっておいて、いきなり狭いだと？

……まあ、それはどうでもいい。些細なことだ。

だが、風呂を貸せだって？

狼狽する理由は分かると思う。

なぜなら、今の奴は俺の年とも然程変わらない、少女の姿だったのだ。

一度も染めたことのないであろう（もとは猫なのだから当たり前か）艶やかに伸びた黒髪。全てを見通してしまいそうな眼力を持った緑の瞳。

今更になって気が付いたことだ。よくよく見れば、権左衛門は目鼻立ちが整っていて、美少女と言っても相違ない容姿をしていた。そんな少女に突然、風呂を貸してくれなどと言われれば、テンパらずに居られようはずもない。

頭に浮かびそうになる妄想を、屈強なる意志の力で打ち消す。

「……確か、猫は水浴びとか嫌いなんじゃないのか？」

「うむ、基本的には好かぬ。じゃが、こういった場合——つまり、死の邪気を払うために湯浴みは必要となる——」

やっぱ、入らにゃ駄目か……。

「む、どうした？ 顔色がおかしいが」

「……何でもない。風呂はその廊下を突き当たりまで行った所を左に曲がって、そこをだな——あー、連れていった方が早いな。こ

「うちだ」

「うむ」

長い廊下を進み、突き当たりを左に曲がる。そこから更に行くともた廊下。更にその突き当たりを右に……。

幼少の頃から暮らしてきたからこそ、俺自身は慣れている。

だが、初めて入ったものなら、間違いなく迷ってしまうだろう、この複雑な家の構図。

正直言って面倒臭い。

俺は権左衛門を案内する間に風呂の簡単な説明をした。

「あー、棚に着替えの服が何枚か置いてあるから。そこから好きなものを選んでくれ……あ、それと、シャワーは手前に捻ると出るから――」

「ふん。しゃわぁ……な。分かった、下がれ」

何か、不穏な気配がしたが気のせいだろう。

俺は言われた通りに下がって、ドアを閉める。

曇りガラス越しに着物がさわさわ擦れるような音がする。カチャリ、と折畳みの扉を開く音。

これから風呂に入る奴がいるんだから、当たり前、当たり前……。そう、自身を説き伏せて、後退りするように離れる。

「さて、どうしたものか……」

そこで、これからの対処について考えようと思った、その時だった。

「にゃあああああああ!？」

風呂から謎の怪音波が発せられる。それはまるで、猛獣の唸り声にも、黒板を爪で擦った時の音にも似ていた。

あまりに唐突な轟音に鼓膜が破れるんじゃないか、と思わず耳を押さえる。

すぐ目の前で窓ガラスが破碎。天井からは埃が落下する。

「うおい、何だってんだ!？」

俺が独り言を言う間も、騒音は風呂場から吐き出され続け、まったく止まる様子を見せない。

耳を押さえながら、何とかそこへ向かう扉に隙間を作ることが出来た。

空間に体を無理矢理、ねじ込む。

たった今、この先には俺と同じくらいの歳に見える少女が――。

そんな考えが一瞬頭をよぎったが、すぐ様、振り払う。

そして、扉を開いた。

中では毛を逆立てた黒猫が目を見開き、びしょぬれになっていた。ガツカリなような、安心したような。少々、複雑な気持ちである。それはそうと、このままでは耳にも限界が来るだろうし、近所に騒音被害で騒がれても困る。

水浸しになり、うずくまって吠える黒猫を尻目にシャワーの蛇口を止める。

「一体、何だってんだよ!」

ビクリと震え、黙る黒猫。その首辺りを無造作に掴み、風呂の外へ。

渋きを飛ばされないよう、すぐ上にバスタオルを被せた。

黙っていた黒猫は少しすると、人間の姿の時と同じ、若干低めな女性の声で話し始めた。

「……あれを捻れば水が出る、などとは言わなかったではないか」

「言っただろ! あ、れ、がシャワーだ! 知らない癖に知ったかぶりするんじゃないよ!」

押し黙る黒猫。

「そもそもだ、俺は助けってくれなんて言わなかっただろ? 助けたのはアンタの勝手。それで上手く行かなかったからって俺を巻き込

むなよ!」

ちよつと言い過ぎたか。実際、感謝はしてる訳だし。

いや、でも普通の高校生活を営むにはコイツにいらなくなって貰わないと……。

「……お主、もしや、気付いていたのではないか? ワシがしゃわあを理解していないのを」

「うっ……」

凶星だったかも知れない。

追い出す口実を見つげるため、分かっている様子に気付きながらも、見て見ぬ振りをした。

「そもそも、ワシはここ最近まで野良で暮らしていたのじゃ。最近のカラクリなど分かる訳があるまい?」

それもそうだ。だが――。

「一度の失敗をなじってはならぬ。幾度でもチャンスを与えよ。そして、次からはもう少しきちんと説明するのじゃ。よいか?」

「……分かった」

完全に言い負かされた。悔しいが、コイツの言っていることは正しい。

妙に勘がいいし、年の功って奴だろうか。

「分かれば良い。……さて、今度こそきちんと湯を浴びねばな」

そう、権左衛門が言うのと、バスタオルの中で何か異変が起きた。シルエットが猫の形から人の姿へと移り変わっていく。

いかん、と思った時にはもう手遅れ。

目の前にはバスタオルに身を包んだ黒髪の美少女がいた。

濡れた髪が妙に色っぽく扇状的で……ああ、何を考えてるんだ、俺は。

コイツは猫だぞ、猫。

「……顔が赤いがどうかしたか?」

そんな俺の心情も露知らず、権左衛門は尋ねてくる。

「な、何でもない! ……が、その状態で人間の姿にならないでく

れないか？」

「？」

バスタオルを外套のように纏ったまま、権左衛門はすくっと立ち上がる。

「意味が分からぬが……まあ、よい」

そして、普通に風呂場に入ろうとする。

俺はその時、家中のガラスが割れていることを思い出した。

「ちょ、ちょっと待った！　風呂に入る前に、お前のせいで割れたガラス、何とか出来ないか？」

姿を見ないため、目を逸らしつつ言うと、

「ふむ……。面倒ではあるが仕方あるまい。そこで見ておれ」

猫神はしばし思案の後、ため息を吐いた。

それから、精神統一をするように目を閉じる。左手でバスタオルを押さえながら、右手をゆっくりと振り上げる。

空気が固定されるような奇妙な感覚。時間が止まる。

緑色のオーラが猫神の全身を包んでいた。

そして、次の瞬間、人差し指だけを立てると、素早く振り下ろす。パキパキパキ……

目の前で、不思議な現象が起こる。

割れたはずのガラスが時間を巻き戻すように元の姿に戻っていく。俺があっ、と声を上げようとした時にはもう、割れたはずのガラスは完全に元通りになっていた。

「ふう、これでよからう。では、ワシは湯に入る」

何事もなかったかのように身を翻し、猫神は風呂場へと入っていた。

「コイツはマジ物みたいだ……」

その場で俺はへたり込む。腰が抜けたみたいだ。

「こういうのを聞くなりゃっぱアイツか——」

独り言を呟くと同時に、俺はアイツに連絡を入れることを決めた。

序ノ七（前書き）

六ヶ月ぶりくらいでしょうか
（苦笑）

序ノ七

「ええ、何それ、本当の話？」

受話器から伝わってくるのは、どこか間の抜けた声だった。

俺はこういう奇妙な現象に関してはプロと言ってもいい、栄ちゃんに電話をした。

オカルトハンターたる栄ちゃんなら何かいい提案を返してくれるに違いない。

もちろん、話題は異能を持った化け猫、猫神についてである。

俺は別れ際に起きた事件の始終を伝えた。帰りの際、トラックに挽かれかけたこと、そこで猫神に出会ったこと。榊紅葉のことを考えていたこと……いや、そこは黙っておこう。言うのは必要最低限でいいはずだ。

「猫神か、やっぱりいたんだね！」

それらのことを話すと栄ちゃんは心なしか、楽しげな響きを汲んだトーンで言った。

「そのウキウキな態度、当人からしてみれば腹が立つこと然りだな」

そもそも何の疑いも持たずに信じるのが、栄ちゃんの良い所というか。

「え！？ 何、もしかして今までの話、全部嘘なの？」

俺の言葉に今度はひどくガツカリした様子の声をあげる。

声色だけでもこうも表情がコロコロ変わるから、まったくいじり甲斐がある。

「いや、もしかしても何も、俺は冗談ではこんな話しないぞ」

「良かった」

「良くない。……それで、単刀直入に行く。俺は高校生活をあくまでノーマルで周囲の健全な男子高校生と同様にしたい訳だが。つまり、簡単に言うところだ。猫神を追いつくにはどうしたらいい？」

「……それって、成仏させたいってこと？」

「うむ、まあ、そんな所だ」

俺が答えると、栄ちゃんは少しの間考え込むように唸った。そして、

「じゃあ、簡単じゃない。その猫神さんの要求を飲めば良いんだよ」
そう言ってきた。

「はあ？」

「だって、死者はこの世に未練があるからそこに自縛霊みたく留まるって言うでしょ。猫神さんもきつとそのはず……だから、その未練の原因を取り除いてあげれば勝手に成仏してくれるんじゃないかな」

「な、なるほど……ふむ。それは一理あるかも知れ——」

ん、ちよつと待て……猫神のそもその目的は成仏して天国に行くことじゃなかったか？ しかも、俺が手助けをすることは未練などではなく必要に迫られた副産物のはずだ。

うーん、何か栄ちゃんの考えには色々矛盾点がある気はする。だが、正しいような気もする。

あー、くそ。考えれば考えるほど深みにはまる。泥沼だぞ、こりや。

「……もつと簡単に奴を消す方法はないか？」

「うーん、そうだねえ。あるにはあるかも知れないよ。けどさ、今分かり得る範囲で出来ることとなると限られてくるでしょ？ とりあえずは猫神さんの存在が消えるかも知れないっていう、その可能性に掛けてみるのが一番良いって！ 頑張ろうよ」

俺は栄ちゃんの励ましで多少、平常心を取り戻した。そこで、

「……それもそうか」

居直ることにした。まあ、なるようになるさ。問題があればそれから決めれば良い。

「僕も何かあったら、相談に乗るからさ。正直な所、その猫神さんにも会ってみたいし。それじゃ、また明日ねー！」

最後に本音をボソリと言って、栄ちゃんは電話を切った。

「おう、じゃあな」

「誰かと話をしていたようじゃが、独り言か？」

電話が終わった頃、権左衛門が風呂から上がって戻ってきた。まったく、お前の対処法について話し合っていたというのにいたって本人はのんきなものである。

しかも、服は母さんのものが置いてあったはずだが、何故か着ているのは俺のトレーナーだった。

元猫というだけあって、小柄な体形のためにトレーナーがダボダボに見える。

ふむ、男物の服を来た少女というのもなかなか……と、おっとあぶないあぶない。コイツは人間じゃなくて、猫神とかいう訳のわからん代物だった。

「この廊下、一人で戻ってこれたのか。初めて来た奴は大抵迷うんだが」

「フン、そんなのは造作もないことじゃ。ワシが力を使えば、先の道など容易く知ることができる……して、お主が持っているのは何じゃ？」

俺には権左衛門が何を言っているのか解らず、一瞬聞き返した。そして、手中に握られたものを指していることに気が付いた。

「これか？ これは電話」

「電話？」

「簡単に言えば、遠くの人と話が出来る機械だ」

「キカイ……」

「ああ、機械じゃ解らないか？ そうだな。昔で言うところ、

カラクリのことだな」

「む？ ふむ、カラクリか。なかなか面白いな」

そういうと、猫神は不敵な笑みを浮かべる。

「面白いのか？」

「ああ、面白い。ここ最近は文明に携わることが無かったからのう。人間と関わらなかつた時期が長いからのう。その間にそんなカラクリが作られておつたのか。確か、前の主は気持ちを伝えるため、文とやらの詩をしたためて、互いに送り合つておつたぞ」

猫神はそう言つて頷く。

「前の主がねえ……って、詩を書いた文！？」

「ん、どうした？」

「どうしたも何もその文化知識は平安時代だぞ。知識がおじやる止まりじゃねえか！」

「おじやる……悪いのか？」

「いや、悪くはないが……」

時代ギャップのある会話で苦勞しそうだな。電話の説明で確信する。

「……そういや、名前も権左衛門とか言つたよな。もしかして、自分で付けたのか？」

「いや、ほんの昔、まげを結つた侍の友人に付けられた物じゃが。

過去に付けられた名の中では一番気に入つておる」

今度は江戸時代か。

「どうでもいいが、それ、男に付ける名前だぞ？」

「ふむ……男とな。な、何ッ！？ それは誠か？」

途端に狼狽える猫少女、権左衛門。

「本当だが……知らなかつたのか？」

「あ奴め……」

俺に返事を返すことなく猫神は顔を赤くし、わなわなと震えだす。その様子は妙に愛らしい……などと俺は思わんぞ。

そんな顔色から権左衛門はすぐ冷静になり、最初の調子を取り戻した。

「まあよいか。それはそうと修治、ワシは小腹が空いた、何か捧げ物を用意するのじゃ」

「小腹って……お前、死んでる癖に喰うのか？」

「背に腹は変えられぬと言うであろう。死んでも腹は空くのじゃ」
論理説明に使う日本語が間違っている気がする。

「詳しい話は食事の後にしよう」

すると、猫神はクンクンと鼻を利かせた。犬ではあるまいが、嗅覚は人より上なのであろう。理には適っている。

そうやって、すぐにキッチンへの道を見付けると、そこに向かって歩き始めた。

「あ、おい。ちょっと待て！ そっちには——」

「聞く耳持たぬ。腹が不快な音色を奏でる刻限じゃ」

それは小腹じゃないだろ……って、聞けよ。そこには今、母さんがいるんだ！

ガチャリ。

あ、アイツ開けやがった。

「修治？ ちょっとお皿並べるの手伝ってくれない……あら」

包丁で小気味のいい音を立てていた俺の母さん、理沙が音に気付いて振り向く。

ちなみにその場にいるのは俺でなく、猫耳尻尾付きの黒髪美少女な訳である。シチュエーション的に、変な風に思われないか？

「あらあら、もしかして修治のお友達？」

権左衛門に余所行き用の笑みを浮かべ、次に予想が的中、俺の方を黄色い目で見つめる。

母さん、違うんだ。信じてくれ、嫌がるコイツに無理矢理コスプレさせたとかそんなじゃないから。

そもそも俺の趣味は猫耳じゃなくてウェイトレス……。

「貴様、もしかや修治の母君か？」

俺の思考を知ってか、否、知らないであろう。黒髪猫耳女は尊大な態度で問う。

初対面の相手に平気で貴様呼ばわりする所を見ると、コイツの利

己的な気質は誰に対しても同じらしい。

「え、ええ……」

ほら、母さんもたじろいでいるじゃないか。

「ワシは猫神、権左衛門じゃ。代々、ネコガミ筋を受け継いできた血筋の者よ、名はなんと言う」

しばらく、部屋を包み込む沈黙。

「ま、まさか……あなた様があの猫神様なのですか？」

その瞬間、母さんは権左衛門の前いきなりひれ伏した。

ちよつと待て、話の内容が掴めないぞ？

「いかにも、ワシこそは猫神じゃ」

「か、感激の至り、私は猫飼理沙と申します」

「そうか、理沙よ。ワシは先刻、ここにおける修治と契約を果たした、例によって再びお主たち一族との腐れ縁が始まる訳じゃ。必要になれば主とも契約することになろう。心の準備をするのじゃ」

「はいっ！」

我が母は心ここにあらずといった恍惚とした表情で返事をする。

「さて、ワシは腹が減った、何か用意してくれ。理沙」

「はい」

それ自体がさも、当然のこのように母は食卓の準備に取り掛かる。

まてまて、話の流れが読めない。いや、分かってないのは俺だけなのか？

そのように考えている間にも皿が並び、料理が盛られていった。着々と準備は行なわれ、

「なんじゃ、修治喰わんのか？ 喰わぬならワシが代わりに喰ってやるぞ」

そう言つて、俺の返答も聞かずに前方の皿から肉だけを綺麗に奪い去るところまで僅か、十数分。

「俺の飯が……」

「む？ 何をばやいておる、返事を返さなかった修治が悪いのでは

ないか」

返事を返す暇も無かっただろうが、とツツコミを返そうとする。が、嬉しそうにハンバーグを頬張る権左衛門の、長い年月を生きてきたとは思えない子供じみた顔を見ると鋭気が萎えていった。

「うむ、実に美味であった」

気が付けば、全て平らげてしまっている。

「有り難きお言葉です」

感激した様子で胡麻を磨る母さん。

「さて、湯で汚れを落とし腹も膨れた所で本題じゃ。話してやるとするか。猫神とネコガミ筋について」

そう言って、権左衛門はニヤリと笑った。

息子の俺としては二人の様子を見るうちに色々な意味で悲しくなってくるのだった。

序ノ七（後書き）

大学に入学し一人暮らしの生活が始まってからサイトに来ること自体が少なくなってしまう、更新が遅くなってしまう（――；

まさにペンネーム通りの状態ですね（苦笑

ここまでは元々書き終えていたのでUP自体は出来たのですが、次話からはほぼ全く書き進めていない状況なので、果たして完結するのはいつになることやら。こんな中途半端なところで止まっていることに申し訳ない気持ちでいっぱいです。

プロットを書き上げた後に続きは書き始める予定なので、再び長期UPが出来ないと思われませんが、堪忍して下さい……。。

序ノ八（前書き）

二年前くらいに大学卒業しました。生きてます。定期的に更新出来ればよいのですが、書くの鈍いです。多分、呪いでしょう。まったく困ったものです。

序ノ八

「さて、話してやるとするか」

そうして権左衛門は猫神とネコカミ筋について、とうとうと語り出した。

「かつて、ワシのような憑き神と呼ばれる存在は八百万と呼ばれるほどに、この現世に数多暮らしておった。みなはそれぞれに異なった考えを持ち、時には傷つけあうこともあったが、普段は助け合い、たまには人間をからかったりして暮らしていた。平和を満喫していた訳じゃ。だが、ある日を境にしてプツリと糸が切れるように姿を消してしまったのじゃ。少しずつ、少しずつな。消えたと言っても八百万その全てではない。一部は残った。原因は判らぬが、おそらくは憑き神にとって必要な依り代たる人間が少なくなってしまったことが原因であろうな。初めから他人頼みでしか生きられぬ憑き神は淘汰される運命さだめにある存在だったのかも知れぬな。うむ――」

権左衛門は過去を懐かしんで一人勝手に頷く。

母さんは神妙な表情で話にじっと聞き入っていた。

「で？　それが俺の家に居候するのどう関係して繋がるんだよ」

このまま話はダラダラ続きそうな様子だったので、うやむやに誤魔化されない内に俺は先を促した。

「まあ、待て。お主が話に現れることを望む、ご先祖様もすぐ出てくるから」

せっかく感慨に耽っていた所を邪魔され、気分を害した様子の権左衛門はされど、話を切らずに先を続ける。

ほんの一瞬だけ、緑の瞳がゴゴゴと燃えるように光ったように見えたが、ギョツと畏縮した俺を見て、

「あ奴の家系じゃし、仕方ないか」　と、意味深な言葉を呟き、俺を呪うのは思い止まってくれたようだ。そのすぐ後、母さんの俺に対する貴様何言ってる、という無言の威圧、もとい修羅の如き表

情にダブルパンチで畏縮することになる。

「時は天下の江戸、ワシは紅の橋のたもと、欄干の上にて普段使う猫の姿でたそがれておった。元々その時代での依り代の器になりそうな人間を探しておったワシはなかなか適当な者が見つからず、ほとほと困っていた。そこにぶらりと通りかかったのが修治のご先祖様という訳よ。」

幸い、ワシの欲する依り代の器を奴は持っていた。

ちょうど退屈しておった所に珍事がやってきたのじゃ。

助けを求める娘が逃げながら、橋の辺りまでやってきてな、後ろからはいかにも小物といった佇まいの男共が追い掛けてきていた。

このままでは娘は哀れ、悪漢に襲われてしまう。

その時、修治よ、お主のご先祖様は何を思ったか、その場に割り込んでいった。無鉄砲ではあったがなかなか面白い展開じゃ。

ワシは興味片手間にその珍事を眺めていた。あ奴、なかなか武道に長けておってな。悪漢に追われていた娘を後ろ手に庇ったかと思えば、あつという間に助けてやった。なかなか器量のある奴じゃ。

無論、力が足りなければワシも尽力するつもりではあったがな。なんせ、ようやく見つけた依り代たる器じゃ。そう簡単に手放せる訳あるまい？」

そこまで話すと満足したのか、権左衛門はうむ、と頷きながら口を閉じた。

なるほど、どうやら俺のご先祖様と猫神の馴れ初めはそこから始まったらしい。だが、結局猫神とネコカミ筋については今一つ、分からずじまいだった。まあ、きつといつかちゃんと話を聞ける機会はまだあるだろう。

「そのご先祖様の名前は何て言うんだ？」

最後に興味があつたので、それだけを聞いてみる。

「猫飼秀成」

権左衛門はそう答えた。

思っていたよりも平凡な名前だったので、少しだけ残念に感じ

る。俺には大それたことが出来る人物には思えなかった。しかし、話だけならば十分にたる大物である。百聞は一見にしかず、だが、その出来事を見る機会は一生訪れることはないだろう。時代という名の時の流れをまたいで生きてきた猫神にしか、分からないことであるようだった。

ご先祖様のした偉業など、実際に目に出来ないのであれば、それはないも同然だ。

「あら、やだ。ご飯冷めちゃうわね」

母さんが湯気の上がらなくなった数品のおかずを見て、頬に手を当てる。それから茶碗に釜から白米をよそい始めた。

「はい、どうぞ」

俺と権左衛門、それぞれに手渡されるお碗を受けとる。その後、自分の分をよそってから、いただきます、と手を合わせた。

俺は今の話について何を思えばよいか分からず、ただ黙々とご飯を口に運ぶ。その時、何を食べたかもはつきりと認識出来なかった。

「どうした？ 何を惚けておるのじゃ」

権左衛門に話し掛けられて思考の海から戻ってきた俺は質問にはすぐに答えずに、ただそちらを見やった。

猫神、権左衛門。未だはつきりと正体を掴みきれない、というよりも掴み所のない食えない奴。

それが俺の奴に対する印象だった。今は二階の自分の部屋に戻り、何をするのがベストかぼうつと考えている。奴も着いてきて、ベッドの上を占領して早くも植民地化していた。俺は搾取される立場という訳だ。

「どうして俺の部屋にいるんだ？」

明らかな敵意を向けて、俺は侵略者に対して問い掛ける。

「ん？ 修治よ、主はワシの片割れであろう。なれば、問題はあるまい」

「その論理展開が理解出来ないんだが」

「まあ、気にするでない。事は全て成るように成るのじゃ」

権左衛門は樂觀的に言うと、ベッドで再び、ゴロゴロを始める。幸せそうな表情に愛着を僅かでも感じることに苛立ちを隠せない。

「元は猫なんだし、天井とかで月を見つづごろ寝すればいいんじゃないのか？」

俺の提案に、しかし権左衛門は首を振る。

「春とはいえ、夜はまだまだ肌寒いのだぞ？ そんな寒中にこのように可愛らしい女子おなこを放るとは些か人でなしではないか？」

「自分で自分を可愛らしいという女子には少なくとも気を使う理由はないな」

俺は一言で権左衛門の訴えを一蹴する。

能力面で勝てない分、こういった所で採算を取っておかないと割に合わない。さもしいとは思えど、こうでもなければ、やっていけない。

「大体、人間じゃなくて猫じゃないか」

「む、そこを突かれると何とも痛いが……」 そう言って権左衛

門は何故か脇腹を押さえる。槍か刀で突かれたような大袈裟なジェスチャーだが、とりあえず気にしないことにする。

「まあ、良いではないか。減るものでもなし」

「少なくとも、俺の寝場所が奪われている」

「その程度気にするようでは懐の矮小さが知れるぞ？ お主にはそこがあるではないか」

権左衛門は首でしゃくるようにして、方向を顎で差す。

「そこ、って……」

どう見てもそれは押し入れだった。どこかの狸型ロボットのように中を根城にしろということか。

「押し入れとてそれなりの空間はあるぞ」

「俺の意思はどう反映されるんだ？」

「ふむ、そのようなことは知らぬ、存ぜぬ、気にはせぬ。見ざる、言わざる、聞かざるじゃ」

権左衛門はそれきり、ガバツと布団を抱き締めて、ここはもうワシの場所じゃー、と言わんばかりだった。

「なら、俺は向こうのもう一つの方にある部屋で寝るかな」

権左衛門が場所を譲らないというならば仕方ない。俺が妥協案として別室を使うのがベストだろう。

そうして肩をすくめつつ部屋を後にしようとする。

「待てッ」

強い口調で制止の号令がかけられる。

「ん、どうしたんだ？」

権左衛門が声を荒げた理由が分からず、問うことにする。

「修治、お主もこの部屋で寝よ」

「いや、だって俺の寝る場所占領してるじゃんか」

「……」

権左衛門はキツと口をつぐんだまま、答えない。たまにこちらを見て目を泳がせた後、また逸らしてしまう。心なしか頬が朱に染まり、ある感情を秘めた表情を浮かべていた。

「俺に、一緒に寝ろって言ってるのか？」

「……」

問いかけに返ってくるのは無言。

「寂しいってことか？ ……なんだ、それならそうと早く言えば」

そう言って近づく俺を権左衛門は片手で制止する。

「いや、違う。お主の寝場所ならば、そこがあるであろう？」

そうして指差すのは。

「って、押し入れじゃねえか！」

「ふむ、その一室は押し入れというのか」

だぼだぼのトレーナーで腕を組む権左衛門は神妙そうにして、
呟く。

「押し入れを一室というには語弊が多大にある気がするが」

「まあ気にするでない、寝るだけなら十分であろう？」

「それを決めるのはお前じゃなくて、俺だと思っんだが」

「ふむ、そうかの？」

聞いているのか聞いているふりをしているのか、どこか落ち着きなくパタパタとベッドの上で感触を楽しんでいた権左衛門は、

「では寝るぞ」

突如、動作を止めてクタリと力尽き、次の瞬間にはすうすうと寝息を立てていた。

「おい」 俺の何度かの呼び掛けに、権左衛門の反応はなかった。口元には涎。既に熟睡領域に突入したようである。

「……」

無言の溜め息を吐き、俺は押入れの扉を開き、その長かった一日を脳内で回想しつつ、眠りにつくことにした。

序ノ八（後書き）

矛盾点とかがないか、一度読み返しをしようとするに恥ずかしくな
ります。ある程度出来上がってから、再編集をしたいと考えていま
すが、ご容赦下さい。

次ノ一（前書き）

遅筆なりに急いで文章をつむいで行きたいと思ひます。

次ノ一

——そこは暗い森の中だった。

鳥や獣の鳴き声が僅かにあるばかりの喧噪から解き放たれた静寂。月光で浮かび上がるのは敗北者の姿、自然の緑に囲まれた薄暗がりの中にバラバラに惨殺された死骸がある。

その形になってしまいう前、多くの獣と同じように、その骸は四肢で歩く動物の姿をしていた。

おそらく始めは二つの命を持っていたはずのものである。

何故ならば同じ形をした肢が一對ずつ、場所は散らばっているが全部で八つあるからだ。

冷たく涼しげな月光。おぼろな輝きが物言わぬ骸を照らしあげていた。

静寂が、沈黙が、どこか死という現実に対して、明確な境界を作っているかのように、まるで世界から拒絶されているようだった。

近くでガサガサという物音がする。

濃緑色の藪が揺れ動き、そこにある気配を捉えた青白い月光が照らし出していく。

現実感のない空気の流れ、存在を知覚するために、視線を動かすよりも自然にそちらに映像が切り替わる。

恐れを感じても、そちらを見ることしか出来ない。

人間がいた。

何者かも知れぬ人間が笑っていた。暗いために口元しかよく見えない。だが、その口は三日月型に歪められていた。血の滴る刃物を持ち、薄気味悪くこちらを見ていた。

身体は動かない。ただ恐ろしくて涙がこぼれたような気がした。

「さあ——お前の番だ」

そうして、世界は真白になった。

ぼんやりとまどろむように、緩慢な眠りから目が覚めた。

日課である時計の針の確認をして、遅刻でないことを理解すると、ベッドから起き上がる。

ああ、随分と長い夢を見ていたような気がする。

身体が重く感じるのは寝ている間の体勢が悪かったか、先程まで見ていた夢のせいだろう。

そう、これまでのことは全て悪夢、誰が何と言おうが悪夢なのである。

顔を洗えばさっぱりするに違いない。

そう思って、洗面所の前に立った。

バシャバシャと蛇口から出る冷水を掌ですくっては顔にあてる。

二、三度やるだけで大分頭はさっぱりした。タオルを取ろうと右手を伸ばし、ゴシゴシと顔を拭く。多少、乱暴に扱っても男の柔肌は傷つかないのだ。

水気を十分にとってからタオルを元の位置に戻した。鏡で自分の顔を確かめる。

ちよつと目の下にクマが出来かかっているが、許容範囲。別段、変なところはない。

ただ、

「枯れているな……」

自分の表情を見て、なんとなく、そんな風に呟いてしまった。

さて、一階^{した}に下りるとしようか。美味しそうな朝飯の匂いがあるぞ……！

む……どうも左腕にちよいとばかり違和感を感じる。

が、他のことをしている内、すぐにその感覚は薄れてしまった。

おそらくは気のせいかな、特に何でもないことだったのだろう。もしや、肌荒れでも起こしたかなとゴシゴシさすりながら、俺は階段を下っていった。

「よう、修治。随分と遅かったのう、理沙のあさげならもう出来て

おるぞ？」

扉を開けて挨拶しようと思ったら、急激な立ち眩みに襲われた。寝床のはずのベッドには確かにいなかった。だがなんで、なんでコイツが一家の団欒の場である食卓にいるんだ！？ 奴が部屋にいないことで、そうかそうか、昨日からおかしいなと思いつつもずっと続いていたことは全部夢だったのかと安心したのに……。現実にはこんなものなのか。

いや、本当は現実を直視したくなかったただけだ。そう言えば俺は何で押入れなんかで寝ていたんだ？ ……夢な訳がない。

「お主がなかなか起きぬからのう、あまりに退屈だったもので、猫飼の屋敷を探索することにしたのじゃ。懐かしいが中の様子はだいぶ変わってしまったのう。時の流れを身に染みて感じたぞ。そう思っただけで感慨に耽っていたらの、どこからともなく美味そうな香りが漂ってきてる、釣竿に釣られるように誘われてきてみれば、ほれ、こうして立派なあさげが用意されておる処に到着したのじゃ。これはご相伴に預からない訳にもいかぬじゃろう、そういった次第じゃ」

その……なんだろう。コイツは立ち眩みだけじゃなくて、急性中垂炎^{イタ}まで併発しそうな大事件である。

いつも通り、台所に立つ母さんは笑みを浮かべてこっちを見ている。ただにっこりと。

「母さん、昨日はコイツと家の関係について聞いた気がするけど俺は権左衛門に朝飯なんて用意するのは気が進まない。普通がいいのにまったくもって普通じゃない」

「まったく、面倒臭がりの癖して無駄にせっかちにことを荒立てるのが好きじゃのう。ほれ、そんな修治には仕置きじゃ」

「うお、熱、熱ッ熱熱ッッ！？」

その途端、左腕に急激な高熱が発生した。いや、正確には腕の紐が結ばれている辺りだろうか。火傷の瞬間のように、一歩間違えば気を違えるほどの熱さである。

「おい、一体な、なんだってんだ！？ あ、熱い熱熱痛痛痛ッ、」

「カッカッカツ、何も出来ぬ絶望にむせび泣くがよい。そして、見よ。これぞ、ワシが猫紐の力じゃ」

勝ち誇ったように笑う権左衛門はいつのまに取り出したのやら、手中に扇子を広げていた。

勘弁してくれ。どうやら、奴の猫紐とやらには孫悟空の頭にある金の輪っかと同じような効力があるらしい。普通なら、こういうのは特に変わった能力を持たない方がある方の力を制御するために使うものだろうが。なんでヤツばかり？ ……まあそんなことは気にしても結局意味はなくて、現実ではこんなものなのだろう。

「まあ、そういう訳じゃて」

俺が何を考えているのか、口に出さずともわかるといった様子で、ふと権左衛門は、

「あ、そうそう。理沙とも契約したから」

予想外のことを口にした。

「なっ、母さんと!?!」

言われてよくよく見れば、母さんの腕にも俺と同じような、茶色の紐が装着されている。

「契約者って……一人じゃないのか?」

「そんなものは人によりきり、もとい、猫によりきりじゃて。基本的に名字に猫の字があれば契約できるわけじゃし」

「……………」

俺の存在意義って一体……。

ああ、そんなことよりも母さんまでが契約してしまうなんて!

そう、こうして母さんまでが権左衛門の毒牙にかかってしまったのだ。

「ところで修治? 早く喰わぬと栄徳が来てしまうぞ。なんなら、このワシが代わりに食べてやろうかの?」

そう言いながら、既に俺の皿から目玉焼きの五割をかつさっている。半熟の黄身がどろりと皿の表面をこぼれている。これ以上取られては学校の授業半ばで餓死してしまうだろう。俺は溜め息を

吐きつつ、権左衛門から皿をひったくるように取り返すと、朝食を食べることにした。

次ノ一（後書き）

しばらくはのんびりとした展開かもしれません。

次ノ二（前書き）

遅筆なりに週一更新を目標に頑張ります。

次ノ二

「修治くん、おはよー！」

「おう、栄ちゃんおはよう」

俺は親しき友人の挨拶に答える。

「栄徳よ、よく来たな」

「あ、あなたが権左衛門さんですね！　うわー猫神様ってやっぱり本当だったんだー！　こんな身近にオカルト現象、なんて感激、ですッ！　嬉しすぎるので、おはようございます！」

「元気のいい挨拶でよろしい」

「あはは、誉められたー」

栄ちゃんは何故だか、満面の笑顔を浮かべている。

「うん、栄ちゃんおめでとう。じゃ、学校に行こう」

朝のなんの取り留めもない会話をいちいち気にするのはよくないので、俺は玄関での交流を早めに切り上げて学校に向かうことを提案した。

「待て」

が、途中まで身を乗り出したところで、肩をガシッと掴まれた。後ろを向くと案の定、権左衛門。

何故だろう、とにかく厭な予感がする。

「ワシも行くぞ」

「……へ？」

何か今、大変に不穏で不吉な言葉を聞いた気がする。気のせいだと信じたい。

「……どこへ行くって？」

「そんなことは決まっておろう。学校じゃ、ワシも学校へ行くぞ」

「遊びに行くんじゃないんだが」

「そんなことは知っておる！　学校とはいわゆる江戸時代の寺子屋のようなものであろう？」

「……まあ、間違っちゃいないが、多分」

「ならば問題はあるまい」

そういうと権左衛門はいつの間に用意していたのか、ひらがな文字で「ごん」と書かれたファンシーな桃色の背嚢を背負って玄関を飛び出した。

「あはは、修治くん、すっかりやりこめられちゃったね」

「……うっせー」

空気を読もうとしない猫神と空気を判っていて、それでも敢えてちやかしてくる栄ちゃん。いや、栄ちゃんも空気を読んでいないんだと信じたい。そうでないと悲しくなるから。

「さあ、行くぞ。修治、栄徳」

「お前が仕切るなよ、場所とか知らない癖に」

「……ふん」

どうやら、凶星だったらしい。不機嫌になり、膨れっ面になった権左衛門の様子にちよつとだけ勝ち誇った気分になって、俺たちは学校へ行くことになった。

校門前では許可を得ているのか、部活勧誘という名目のチラシ配りパフォーマンスが繰り広げられていた。体育会系と文化系、こういった勧誘の場合、あまり違いは見られない。

部活勧誘に人数が割かれているかいなかで、大きく印象は変わるが。人数が少ない部活の勧誘はなんとなく頑張ってるな、と好感が持てる。

ちなみに好感が持てる、と言っても俺は帰宅部に入部予定だったりするので、あまり関係がないが。

シャイな人間にとって、このロードは苦痛以外の何者でもないだろう。どうせなら、勧誘用紙の代わりにティッシュでも配っていれば、有り難いのだが。物で釣る勧誘自体が認められているかは分からない。

それにしても、いったいどのような術を使ったというのか。

奴、猫神権左衛門は我がクラス（1－A）の一員として、取り込まれることとなった。

いや、正しくは既に取り込まれていた。転校の手続きや自己紹介の挨拶、そんな一切合財をすっ飛ばしてである。どんな手段を使ったのかは見当がつかないが、おそらく暗示か催眠術のようなものを掛けたのかも知れない。

しかもだ。

「皆様、よろしくお願ひしますわね、おほほほほ」

どこから知識を拾ってきたのやら、思わず身の毛もよだつお嬢様口調でクラスメイトと話しているのだ。

お嬢様口調というのも正しいのか、間違っているような気がする。エセお嬢様口調とでも名付けるべきか。絶対におかしい。違和感がありありとほとばしっているでしょう？

どこで手に入れたかも不明だが、気がつけば権左衛門は着物風の衣装ではなく制服を着ていた。ちなみに我が校の制服はダークグリーンに深紅色のネクタイを付けるブレザー型である。

栄ちゃんの耳元におかしいだろう、と小声で言くと、そう？ と疑問系で返ってきた。

「いやあ二人とも、相変わらずみたいだねえ」

その時、背後から親しげな口調で声を掛けられた。ひとまず振り返ることにする。

「お、お前は！」

そこには、柔和だがどこか人を食ったような笑みを浮かべた生徒がいた。高校生にしては長身で大人びた顔立ちであるように思う。小学校の同級会以来だろうか、久しぶりに顔を付き合わせる、もう一人の腐れ縁の姿だった。

「正太郎くん！」

「久しぶりい。名簿の所で名前見つけてさ。まあ、あの二人のユニークな自己紹介で確信はあったんだけどね」

グサツ。せっかく治りかけた傷が……また！

さりげなく毒を吐きながら、微笑みを浮かべるこの男の名前は射手矢正太郎である。

俺、栄ちゃん、射手矢の三人は保育園、小学校まで、何をするとともに一緒だった。

構図的には、射手矢がこっそりばれないようにイタズラをしかけて、栄ちゃんがそれをどうなるかハラハラ見ていて、そのイタズラに俺が毎回引っかかる……そんなパターンの連続だった。

「気がついたなら、声かけてくれればよかったのにー」

栄ちゃんはどこか潤んだ瞳で、拗ねたように頬を膨らませる。

「悪いね。昨日は急用があったから声がかけられなかったんだよ」

射手矢はそういうと肩をすくめる。大仰な仕草だったが、それでも絵になる男とはいるものである。

奴とは怒られるのも、褒められるのも同伴のまさに腐れ縁だったが、その関係も小学生までで終わることになる。

射手矢とは訳あって中学で別れることになってしまったのだ。

当時、同じ学校に行くと思っていた栄ちゃんはボロボロ泣き出し、俺もがっかりしたことを覚えている。それから、同級会くらいでしか、なかなか顔を合わせる機会を失ってしまった。

そんな訳で、懐かしの再会ということだ。

「自己紹介の一件を知ってるってことは……もしかして、射手矢も同じクラスなのか？」

「……へ？ 何、言ってるのさ。修治も自己紹介聞いてたでしょ。」

なら、俺たち同じクラスに決まってるじゃない？」

「それはそうなんだが……すまん」

「あ、修治は不器用だからねー。もしかしてまたあの悪い癖が出た？ 自己紹介の時、めっちゃテンパってたじゃない。だから自己紹介にも気がつかなかったとか」

「う……」 何故だか、射手矢という奴は妙に洞察力に優れている

のだ。普段はのんびり構えているように見えて、やけにピンポイントなことを言ってくる。本当は鷹の目のように絶えず、周囲のことを観察しているのかも知れない。

「ま、まあ、正太郎くんもあんまり修治くんをからかわないで……」
「栄も栄で気づいてなかったみたいだし、数年の歳月とはいえ、寂しいもんだ……」

射手矢は本当に悲しんでいたのか怪しくなるとどこか演技じみた所作で、やれやれと首を振る。

「と、それはそれとして。まさか、修治にあんな可愛い幼なじみがいたなんてね。しかも、病弱なせいであんまり身長が伸びなかったからあんなに小柄なんて……大切にしないと駄目だよ？ 修治」

違う、それは違うぞ。みんな騙されてるんだよ射手矢。コイツは猫神、だから猫を被ってるんだよ、っていうか猫なんだよ！

あと、このクラスには男の名前って所で変だと感じる奴がいないのか？ 俺の悲痛なる心の中の訴えは届くことなく、権左衛門は我がクラスに水と油のごとく奴は違和を伴って溶け込んでいる。もちろん、水がクラスの面々で浮かぶ油が権左衛門だ。

「まあ、落ち着いたらまたどこかで話そうよ。同じクラスになれたんだから時間だけはあるだろうし。ってわけで、これから改めてよろしくっ」

見ている方が優雅な気持ちになれるような、そんなさわやかな笑顔を残し、射手矢は去っていった。

「やっぱり、かっこいいよねえ。正太郎くん」

「まあ……な。きつと、ここでもモテるんだろうぜ」

「そうだねえ……」

ウツトリしながら、一瞬だけ、ポツ、と赤くなる栄ちゃん。

何故だか判らないが少し腹が立った。

次ノ三（前書き）

遅筆なりに週一更新を目標にしています。

次ノ三

「よし、みんな！ 早速だが、今から委員会を決めてもらうぞー！」

澆刺とした声が教室に響き渡る。

現在、俺たちはオリエンテーションの真っ最中である。妖思之高校において、委員会の人員募集は基本的には立候補性、次いで推薦の形式を取っていた。

「黒板に注目してくれ。それぞれの委員会を書いていくからな。希望のところがあつたら、まずは挙手してくれ。人数制限で男女二人ずつだから早いもの勝ちだぞ！」

赤松教諭は身振り手振りユニークなポーズを取りながら、はりきって説明していく。各委員会に二名ずつの選出は最低限必要ということらしい。それだけは赤松教諭の話で分かった。ものぐさな俺としては全員参加でないことがありがたい。

そんなことを思いながら、耳を傾けていると、彼は黒板に委員会の一覧を記述していく。それは妖思之高校において要求される人手の一覧でもあった。

「さあ、これがお前たちに与えられた選択肢だ！」

生徒会、文化祭実行委員会、体育祭実行委員会、選挙管理委員会、風紀委員会、保険委員会、項目は大体こんなものだ。

どれも入ってからが面倒くさそうだ。特に生徒会なんて考えたくない。

正直なところ、どの委員会が楽でどの委員会が苦勞するか、などは入学したての俺たちには分からず、どちらが右も左も分からない袋小路といった様相だ。いずれにせよ、苦勞することは間違いないのだが。誰でもいいから立候補して、早く梓を埋めてくれ。

トップバッターの生徒会に対し、誰も立候補者はいなかった。遠慮して手を挙げないということだろうか。日本人らしいといえらしいのだが、協調性ばかりで遠慮してはいざという時、例えば最後にとつといたおかずを第三者に奪われるような機会があっても文句は言えない。誰も食べようとしないうかつた場合、そういったことはないだろうが。

結局、誰も手を挙げなかったため、推薦で決めることになった。誰しも自ら苦勞を背負いたくないということか。

生徒会には一部の生徒によって、日向葵さんひなたあおいという女子が推薦されていた。髪の長い朗らかな雰囲気の子だった。他に自らやりたという人もいなかったし、前の学校でも似たことをしていたそうなので、彼女の推薦はすんなり採用された。

男子の人は個人的にあまり興味がなかったので、スルーする。俺としては榊さんが生徒会の役員をやっているもおかしくない気がしたが、意見を敢えて口にするのも面倒なため、気にしないことにした。どういう訳だか彼女は立候補しなかった。その理由はすぐに判明した。

榊さんが立候補したのは図書委員会だった。自己紹介の時も本が好きと言っていたから、ある意味では当然といえた。他の女子も立候補したが彼女はじゃんけんにより、図書委員会の立場を勝ち得ていた。

当初、男子の図書委員会希望は気弱な印象の男子一人だけだったのだが、榊さん目当ての男子の影響か、希望者が増加し、男子側の立候補は激戦区の激選区となった。

繰り返すじゃんけんという名の激闘の中、最終的にこの戦いを制したのは、始めに希望を出した草食系な見た目の彼だった。

運とはいえ、じゃんけんに勝ち残った彼を素直に称賛したい。不純な動機がなかった彼の煩悩力マイナスの差ということだろう。

体育祭実行委員会に立候補したのは射手矢だった。

飄々とした態度で爽やかに煙に巻くところはあるが、運動能力が高い上に仕事も出来る奴だからな。

特に反論もなかったため問題なく射手矢の人選は決定した。

今度は1-A女子の一部が体育祭実行委員会立候補に群がった訳だが。羨ましくなんかないぞ、この野郎。

着々と項目が埋められていくが、まだまだすべてを埋めるには人手不足だった。他に立候補する奴はいないのか？

そういえば、権左衛門が今の今まで一言も口にしていないのはどういった訳だろう。委員会とはなんじゃ、とか言って、興味を持ちそうもんだが。

高校の中では落ち着いた印象に見せるため、猫を被っているのだろうか。いや、いくら猫が猫を被った所で、それはあくまでただの猫だろう。

そもそも猫の場合、被るのはなんだ？ 猫以外の何かを被るのだろうか。例えば狐とか狸とか。そもそも実際に何か被る訳ではないから、ことわざの猫を被るとは大きく意味合いが変わってしまうか。思考が脱線してしまった。

くだらないことに思考をはべらせている内に、オリエンテーションの時間制限が来てしまったようだ。

最終的には赤松教諭が事前に用意していたという、くじで決定することになった。彼にとっては不本意だったようだが、この際、仕方ないだろう。

男女別に用意された箱、その中に委員会名の書かれた用紙が入っている。後から、ハズレ（この場合、アタリというべきか）と書かれた紙を加えることで、決まった人員を減らした分の数合わせをしていた。

時間ギリギリではあったが、こうして委員会の人員は決定した。栄ちゃんや権左衛門、俺は委員会に属することなく、学校生活を送ることになったのだった。

「なあ、権左衛門。どうしてどの委員会にも立候補しなかったんだ？　いつもの調子なら、興味を持ちそうなんなのに」

俺は校舎裏に権左衛門を呼び出した。人気のないことを確認してから、問い掛ける。人気を気にしたのは権左衛門が猫を被らなくていいように俺なりに気を遣ったのだ。気がついてるかどうかは別件だが。

「簡単なことじゃ。ワシは何かに束縛されるのは好まぬ。委員会という政府に属することで身軽で動けなくなるのは嫌だったのじゃ」

権左衛門は淡々と答えた。

「生徒会とかは学校の中では権力がありそうなんだが興味はなかったのか？」

「ふむ、権力があるといっても学校の規則とやらにがんじからめで気ままには動けぬのであろう？　ワシは基本的に自由が好きだからのう」

そう言うと、権左衛門はニヤリと不敵に笑う。

疑問だったことは氷解した。権左衛門には奴なりの考えがあったということだ。

「修治よ、もう話は終わりか？　ならばお暇させて貰うぞ、野暮用があるのではな」

「野暮用って何だ？」　権左衛門の野暮用とは嫌な予感しかない。

「ちと学校の中を見回ってみようと思ったのな。なかなか面白いことが見つかりそうなのじゃ」

「付近の人に迷惑だけは掛けるなよ」

「その言葉、そっくりそのまま返すぞ」

俺の心配をよそに軽口を返してから、権左衛門は何処へともなく去っていった。やれやれ。

途中まで出かかった溜め息を飲み込み、ひとまず栄ちゃんの待つ教室に戻ることにした。

次ノ四（前書き）

遅筆なりに週一更新を目標にしています。

次ノ四

オリエンテーションにほとんどの時間が費やされた半日が終了して、今日はもう授業がない。赤松教諭の話によると明日からは通常授業とのことだ。

ちなみに権左衛門は勝手に学校を見学してくるとかいて、どこかに消えてしまった。もう知らん。勝手にしろ。

帰宅するためにカバンを背負おうとすると、天気が良いからと外でお昼を食べようと栄ちゃんに誘われた。そんな訳で春の木漏れ日の下、周囲の喧騒を耳にしながら食事中である。コンビニで事前に買っておいたダブル玉子サンドウィッチをかじっていると隣にいた栄ちゃんが話しかけてきた。

「ねー、ねー、修治くん。部活見学に行こーよー」

目をキラキラとさせながら、期待の眼差しをこちらに向けている。そういう栄ちゃんはこじんまりとした、けれども結構に丁寧な作りをしたお弁当を持っている。

「んー、別に構わないが。ところでその弁当はお袋さんが作ったやつかい？」

彼に対していつものようにそっけなくぞんざいに扱うことも別に出来たのだが、今回は敢えてしないでおく。こればかりはさじ加減が重要だ。

「うん、そーだよー。修治くん、もしかして食べたいおかずでもあったの？」

「あ、いや、そういう訳じゃないが、なんとなく。そもそも俺、交換のための交渉素材がないし」

そう言っ、手に残った今はダブルからシングルに変わった卵サンドをかざして見せる。

「うーん、僕、卵は好きだけどなー。そうだ！　じゃあ、また今度おかず交換しよう」

パチンと手を叩いて、栄ちゃんは一人で納得を始める。

「それで部活見学の方はどうしたらいいんだ？」

「え……あ、そうだったね。ねーねー部活見学、行こうよー」

本当に一瞬だけ忘れていたみたいに、ポカンとした表情を作ったが、すぐに思い出した様子で栄ちゃんはあらためて俺を誘ってくる。

「飯を食ってからな」

時間を潰しがてらに見学するのもいいだろう。せっかくの誘いだ。俺は断らずに栄ちゃんについていくことにした。

「どこに向かっているんだ？」

「お楽しみ、お楽しみー」

色々な部活を見てみたいんだー、という彼の言葉とは裏腹に、どこか向かうべき場所があるとでもいうように栄ちゃんの足取りはスムーズで全く止まる気配を見せなかった。

体育系の部活勧誘や既に活動を始めている野球やサッカー部の掛け声、一方で少々控えめに勧誘をしている手芸同好会などの文化系部活の勧誘を目の片隅に置きつつ、栄ちゃんは足を止める様子がない。周囲の喧噪から離れるに連れ、もしや自分がどこかに誘導されているのでは、というどこか漠然とした不安が募ってきた。

「おい、栄ちゃん。どこに行こうとしてるんだ？」

「部室棟だよ。えへへー」

ニッコリとこちらに微笑みかけてから、再び歩き出す。

部室棟で勧誘してるところというと、たぶん体育系ではないだろうと感じる。がその程度くらいにしか分からない。

栄ちゃんは一体、どんな部活が気になっているというのか。

「まあ、付いてきてよ。詳しいことは中に入ってからのお、た、の、し、み」

どんなに問いかけても、彼の答えはその一点張りだった。

こういう時の栄ちゃんにはあまり良い思い出がない気がする。が、

それでも付き合ってしまう辺り、俺もやっぱり腐れ縁ってのとは切り離せない人間らしい。

ようやく辿り着いた部屋棟はどこか日陰な印象を受ける、爽やかさとは無縁の場所だった。

俺は表の外見だけで判断してはいけなさと目や耳から得られるだけの情報を得ようとする。

一部の部屋のガラスには黒い布が貼られて、中が見えないようになっていた。何の部活か書かれていない上に中の様子を窺い知れない所がすごく怪しい。

あまり疑り深くなるのも良くはないが、その疑り深さが自分の根っこにある性^{さが}ってことになるんだろう。

そう他愛のないことを考えている内に、ある部屋の前で栄ちゃんはピタリと止まった。

「ん？」

「着いた……ここだよ」

心なしか唾を飲み込むような音が聞こえた。声もどこか緊張に震えているような気がする。

ガラガラと音を立てて扉を開けると埃っぽい籠った空気を感じる。次いで、フラスコに入った謎の薬品が目に入った。多分アルコールやシンナーなどの揮発性の高いものと思われる、埃っぽさと薬品臭の混じり合った危険な香りが漂っている気がした。そこに折り畳み椅子に身体を預けた一人の男がいた。

その容姿は陰湿な空気のあるこの部屋とは少々、不釣り合いに見えた。いや、いかかわしさという意味では相応しいとも言えた。もし、彼がタバコをくゆらせていたとしたらすごく似合いそうである。仮にタバコを吸っていたら何かの薬品のガスにでも引火して爆発を起こしていそうではあるが。

茶髪……というよりはむしろ金色に染められた髪、細見の相貌に

目つきは悪かった。だらしくもそれが正装であるように着こなされた学生服、かもし出す雰囲気はいかにも柄の悪い不良のように見えた。

しかしあくまで印象だが下っ端の悪人面というよりはどちらかといえどかっこいい兄貴分という存在感を醸し出している気がした。

「失礼しまーす」

しかし、そんな様子にも気にすることなく栄ちゃんは物怖じせずに入中に入る。栄ちゃんに合わせて、俺も部室に入ることにする。出迎えてくれたのは占い師が使っているような水晶玉や頭蓋骨の髑髏、悪夢を捉えてくれるという言い伝えのあるドリームキャッチャー、怪談話に出てきそうな蝋燭、どうやって用意したのか分からない重々たる仏壇、ハロウィーンの彫り物がされたオレンジ色のカボチャ、などなど雑多な印象を受ける混沌とした住人たちだった。

「ん、ああ、新入生か……。見学かあ？」

面倒臭そうに頭を掻きながら、その不良風の男は訊ねてくる。口調は穏やかだったがどこか獲物を狙う狩猟者のような剣呑な空気を彼は匂わせているように思うので油断は出来ない。

「はい、僕は宋道栄徳でこっちの背の高い方が修治くん、猫飼修治くんです」

おいおい、人の名前を勝手に教えないでくれよ。なんだか嫌な事件き巻き込まれたような空気が漂っている気がする。

「えっと……先輩ですよ」

失礼とは思いつつも、一応の確認として聞いてみることにする。

「おう、俺か？ ……あー、たぶん。その顔を見る限りはそうだろうな」

先輩はジロリと鋭い目つきで俺と栄ちゃんの方を見るとそれから、はあ、とため息を吐く。そして、思ったより素直に名乗ってくれた。

「俺は常盤、常盤金成^{とねわかねなり}」

「ときわ……かねなり先輩」

なんというか、まんま諺みたいな名前だ。そう感じたが、口に出したらきつと怒られるだろう。口にしたい衝動を抑えて黙っておく。「フルネームじゃなくて常盤でいいぞ」

「あ、すいません……常磐、先輩。えっと、この部活は……」

「シィー、修治くん。常盤先輩がきつとすぐに話してくれるから」

口に人差し指を当てて、俺に静粛を促す栄ちゃん。たぶん逆鱗に触れそうなところを事前に止めてくれたって辺りだろう。サンキュ、栄ちゃん。

「あー、詳しい話はまあ抜きにして、まずはここに名前を書いてくれえ」

そうのんびりした口調で常盤先輩が差し出してきたのは、小さな長方形が書かれただけの白い紙だった。ここ、といって長方形の辺りを指差しながらなぞる。

栄ちゃんは言われた通りそこにスラスラと名前を書き出すが、俺にはどうしても先ほどからある漠然とした不安がぬぐえなくて、なかなか書き出すことが出来なかった。今の境遇に対し、既に気持ちは大分げんなりしていたりする。

「ん、どうしたあ？」

常盤先輩の見た目は不良風なので、ちょっと威圧的に睨みながら語尾を上げるだけでも、かなりの迫力がある。

「あの、どうして名前を書かないといけないんでしょうか？」

「見学に来た奴の固有名詞とか、連絡先。そんなくらはフツー手に入れとくもんだろうが」

「えっと、それはまあ、わかるんですけど……」

さっきから俺の危険感知センサーがこの先輩に名前を教えちゃ駄目と警戒サイレンを鳴り響かせている。

「おーい、名前書くぐらいどうってことないだろう？」

凄味を利かせて、俺の中にある本能的な恐れ of 感情を逆撫でしてくる。

「すいません、俺、書きたくないです……」

俺は自分の直感を信じて名前を書くことを拒むことにした。

「ふうん、じゃあコイツがどうなってもいいのかあ？」

「……え、栄ちゃん！」

「修治……くん」

いつの間にそんな近くにいたのだろう。栄ちゃんは常盤先輩に後ろから羽交い絞めにされて身動きが取れなくされていた。

「常盤先輩、それはやり方があくどいですよ」

「あくどい？　ただ素直に名前を書けばいいだけだぞ。簡単なことじゃんか」

殺伐とした空気が生まれ、一瞬にして、部屋は緊張感に包まれていく。

次ノ五（前書き）

遅筆なりに週一更新を目標にしています。

次ノ五

「おう、何やら楽しそうにやっておるのう」

その時、ガラガラと扉が開かれる。どこからともなく現れたのは権左衛門だった。

「なんじゃ、修治よ。聞いておれば自分の名前も満足に書けぬのか？ やれやれワシの片割れでありながら情けない。仕方ないのう。よし、ワシが代わりに書いてやるとしようか」

そしてその場の空気を読まずに、ペンを持った俺の手を掴むと半ば無理やりにして用紙に名前を書き殴らせた。あまりのあっけなさについていけない。

「……あ、」

「おうし、ようこそ。オカルト研究部へ」

先ほどまでの危険さははらんだ表情から瞬間、屈託のない爽やかな笑顔を浮かべる常盤先輩。

「へっ？」

「ほら、ちゃんと入部届けに名前を書いただろう？ なあ、猫飼修治くん？」

「ごめんね、修治くん……」

栄ちゃんが困ったような顔でこちらに謝ってきた。とりあえず話が読めない。

「どういうことですか！ 俺、ただ紙に名前を書いただけですよ？」

「いや、そりゃこういう仕組みって訳さ」

すると常盤先輩はマッチで蝋燭に火を点けてジジジと名前の書かれた紙をあぶり出した。火を点ける瞬間、危ないと思ったが、何も起こらないところを見ると単なる危字だったようだ。

そこには当初ただの白い紙に見えただけの紙があった。だがあぶられたことにより紙は見事なまでに契約書、もとい入部届けへと変化する。

そう、その白紙に見えた紙は蠟燭の火で真の姿を現す禁断の道具、あぶり出しだったのだ。

「あっ、汚ねえ！」

「汚くはない、ほらこのように文字が綺麗にくつきりと……」

「そういう意味の汚いじゃないです！ やり方ですよやり方！」

ついには先輩に対する恐れ of 感情よりも俺自身の中にある突っ込みの氣質が打ち勝ってしまった。

「まあ、そこまで悪いことしたって訳じゃないしなあ……なあ？」

「うんうん」

ねえ、とお互いに同意を求めあう常盤先輩と栄ちゃんの二人。そうか、これは完全にグルの計画的犯行だ。

気が付けなかったことに今更ながら泣けてくる。しかも、この場をかき回したのはまたもや権左衛門である。猫神どころか厄病神なのではないか、奴は。

その用紙にどれだけの強制効果があるのか確認は取ってはいない。が、きつとこんなしょうもないことに学生部は対応してくれないだろう。

なんとか逃げ出せる抜け穴を見つけ出そうと頭を回転させて画策する。

「そうだ！ 部って人数が規定に届いてないと部としては認められないんじゃないですか？」

「む？ このオカルト部とやら、人手が足りぬのか。面白そうではないか、ワシも入るぞ」

アンタは少し黙ってなさい！

俺の心の訴えもむなしく、入部届けに権左衛門はそそくさと名前を記入してしまう。俺の逃げ出せる可能性がまた少しだけ薄くなった。

「そうだなあ、人員としては部に認められるにはあと一人必要ってことになるんだが」

「あの、多分ですけどそれは俺とコイツも人数に数えられてるんで

すよね」

「あん？ 何言ってるんだ、当たり前だろうが」

ですよね……、思わず心の中で失笑する。既にメンバーに数えられてしまっているとは。どうやら諦めるしかないようだ。基本的には何もしたくないが、やるからには真面目に取り組みたい。そんなイマイチ理屈の通らない論理が構築される。そういった性分なのだ。きっとだが、これから先の人生、俺は巻き込まれ妥協型目苦勞人種のままで一生を終えるのかもしれない。やれやれだ。

「さて、ここにいます中で他にオカルト研究部に入ってくれそうな人間を知っている奴はいないか？」

さっそく部のリーダーシップを取り始める常盤先輩。なんとなく戦隊物だったらレッドかブルーの役割が似合うように思う。

「ええと、とりあえず僕はノルマ達成で大丈夫ですか？」

ほんの一瞬、栄ちゃんが俺の方をチラリと見てから、恐る恐る問いかける。ああ、何となく話の流れが見えてきた。

「んー？ まあ、ノルマって分には問題ないんだが、でもまだ栄徳に心当たりがあるなら大絶賛募集中だぞ？」

「のう、金成よ、お主自身には心当たりはないのかの？」

立場上是後輩なのにも関わらず、権左衛門はいつも通りの口調で常盤先輩に訊ねる。教室での、あのエセお嬢様口調には飽きたのだろうか。コイツの考え方がもう良く分からない。

「ああ、残念ながら俺には心当たりがない。人脈の都合ってもんだかな。修治はどうだ？」

突然、常盤先輩に名前前で呼ばれてびっくりする。だが、よくよく考えればおかしいことでもなんでもない。おそらく事前に栄ちゃんから俺の名前を聞いていたってこともあり得るから、ここでの自己紹介以外にも部員候補としても名前が挙がり、きつと聞いた回数で自然に覚えたんだろう。

「俺ですか……俺も友人は限られているというか……」

俺の知る限りの人間をピックアップする。射手矢は過去からの経

験則でおそらく既に弓道部への入部を決定しているだろう、なんせあの百発百中といってもいい見事なまでの腕前、腐らせるにはもったいない。また、他に誘えそうなオカルト大好き人間として、よく知る栄ちゃんはこうしてすぐ近くにいるのだ。他に心当たりなんて……

「あ」

「ん、どうした？」

「どうしたのじゃ？」

「修治くん、どうしたの？」

各々の問い掛けが俺に掛かる。

たった一人だけ思いついた。だが、その人はオカルト研究部に入るかどうかはあまりに不確かな人物だった。まだ良く知り合っていない上に可能性は全くの不明瞭。そんなことを言ってしまうば、確実なことなどはそうそうないものだが。試すだけ試してみるの悪くない。珍しく消極的ではなく積極的な考えに至った俺はその人の名前を出してみることにした。

栄ちゃんは「あ、なるほど」といった顔をして、ニッコリと笑う。他の二人もふむ、と腕組みをしてどうやら一考の余地ありのようだ。既に帰宅している可能性もあったが、俺はその人物がおそらくいるであろう場所に単身向かうことにした。

次ノ六（前書き）

遅筆なりに週一更新を目標にしています。

次ノ六

こんな機会でもなければ、自分からわざわざ会いに行くこともなかったかもしれない。

その点に関してはオカルト研究部の存在に感謝してもいいのかも知れなかった。けれども、オカルト研究部という存在自体の異質さは女の子を引かせるには十分な能力があると感じる。期待は脆かった。

学校における腰を落ち着けて物事に取り組める場所。静謐な面持ちを持った図書館は場所や人間の性格によっては集まりや団欒の場を作れそうな様子をしていた。だが、それもあくまで一部に過ぎず、基本は静粛な場所だった。そこに榊さんの姿を探して、左右を本に囲まれた通路を闊歩する。すると、彼女はすぐに見つかった。

榊さんは館内に幾つか用意された勉強机の内の一つを使って、ここで本を読んでいた。英語の題名の古めかしい革製の赤表紙の本だった。何かの参考書というよりはファンタジーに出てきそうな魔法の呪文書とか、そういった雰囲気^{ページ}を漂わせていた。物静かに時々、頁をめくる音がある以外は他の音が発せられることはない。髪の長い少女が本を読んでいるだけだというのに、それはすごく絵になっていた。声をかけるのをためらう内に、向こうの方がこちらに気づいてくれた。

「どうかされましたか？」

細くか弱い、だが透き通るように澄んだ音色の声。けれど、どこか秋の落ち葉のように寂しげな響きだった。

「あ、えーと、榊さんだよね、俺の前の席……」

当たり前のことなのに、何故か聞いてしまう。

「ええ。あなたは猫飼修治さんですね」

同じように、榊さんの方も問いかけてくる。

「あ、ああ」

「私に何か御用ですか？」

頬に人差し指を当てて、首を傾げつつ同じことを再度訊ねられる。その仕草が妙に女の子らしくて少しだけ可愛らしく感じた。首を傾げる様子はどこか女性らしさを感じた。比較対象が権左衛門なのは問題かも知れないが。

「えっと、榊さんはもう部活に入っていたりはするの？」

「いいえ、まだ決めかねていますので。今の所は何かの倶楽部に入る予定はありませんね」

「そっか……じゃあ部活の勧誘だって言ったら話くらいは聞いてくれるかな？」

「そうですね。構いませんよ」

そう言って、榊さんはこちらにニツコリと微笑んでくれた。俺の話に対して好意的ではあるようだ。

俺は賭けに出ることにした。

オカルト研究部の活動内容、榊さんがオカルトに興味はあるのか、俺はまた聞きのでっ上げも織り交ぜつつ、自分の基準の範囲内なるべく面白おかしくなるように語って聞かせた。自らの営業センスは分からんが。多分、現時点での最高基準だっただろうと自負する。

本来、こういう分野は栄ちゃんの方が得意なんだろうが、今回は俺のミッションだ。甘んじてその役目を仰せつかろう。努力は嫌いだがそれでも精一杯善処しよう。

大概の女の子だったら、ちょっと引いてしまいそうに感じる話を榊さんは時には興味深そうに、またあるいは楽しげに聞いてくれた。控え目にもそんなそぶりを見せる様子が彼女は優しい女の子だということを雄弁に物語っていた。戦力になるかどうかは別にして、友人としての魅力を十分に持っているように思う。

「で、どうだろうか。オカルト研究部に入ってみる気にはなったか

な？」

俺はあまり期待はせず、けれど全く期待しないわけでもなく、そんなあやふやで曖昧な感情を持ったまま、榊さんに訊ねてみた。

しばしの思案の時間が館内の静寂と織り交ざり、なんとも言いようのない空間を作り出す。返事を聞くのが怖い。果たして回答はどうなるだろうか。

「ふふ、大丈夫ですよ。入部しても」

俺がよほど追い詰められた顔でもしていたのか、榊さんは笑う。それから彼女の声色がどこか穏やかなものに変わり、返答がもたらされた。

俺はよし、と心の中でガッツポーズを取る。割の低い賭けに勝ったという気がした。

何かを成したというのとはまた違うが、達成感是十分過ぎるくらいに得られた。

「よし、じゃあ善は急げだ、先輩たちの所に一緒に来て貰えるかな」「あ、すみません。この本を借りてからでも大丈夫でしょうか？」

榊さんが申し訳なさそうにして、断りをいれる。彼女の本の貸し出しが完了してから、部室棟に戻ることにする。

彼女は予想通り、人当たりの悪い子ではなかった。

きつと、オカルト研究部の中でも嫌われるタイプの人間ではないだろう。

しばらく歩きながら、軽い談笑を続けた。

様子がおかしくなったのはオカルト研究部の部室に幾分近くなったからだった。突然、傍らを歩く榊さんの足音が聞こえなくなったため、俺は後ろを振り返った。

榊さんは立ち止まり胸元を押さえて、荒い息を吐いていた。明らかにただ事ではない様子だ。

慌てて駆け寄ろうとすると、榊さんは片手でそれを制した。

「だい、じょう……ぶです、から」

「大丈夫って、苦しそうだよ」

どう見ても、大丈夫そうには見えなかったので俺はどうしたのかと声を掛ける。

「発作みたいなの、ものなんです。すぐ、に……落ち、着きます……から」

榊さんは歯を食いしばり額に汗を浮かべて、絞り出すように何とか途切れ途切れに言葉を発する。すぐに落ち着くようには見えなかった。

「けど……何か出来ることはある？」

一杯一杯の彼女に声を掛けていいものか迷ったが、何もしないよりはそちらの方が有意義だと思って、問い掛ける。答えが返ってくることは期待していなかったが、榊さんは答えてくれた。

「保健室に行くことが出来れば、後は……何とか」

「わ、分かった、りょーかい！」

それさえ聞けば善は急げだった。肩を貸して榊さんが保健室まで行くのを補助する。慣れていないこともあり補助というには少々きこちなかったが、とりあえず保健室の前までは到着することが出来た。

「修治、さん……ありがとう。ここからは、一人でも大丈夫、です……」

移動の間に多少落ち着いたのか、先ほどまでに比べると彼女の呼吸は穏やかに変化していた。健気に俺の手を取り、弱々しくも声を掛けてくれた榊さんは保健室の扉を開けて中に入っていた。

俺は心配だったので、榊さんに続いて保健室に入ることにした。保健の先生は慣れたもので、何があったのかを手身近に聞くとすぐに対処してくれた。榊さんをベッドに横にした。

「もう心配ないわよ」

「ありがとうございます」

俺は感謝の言葉を先生に向けた。

呼吸が落ち着いてきた榊さんは、

「ごめんなさい。倶楽部のお部屋には次の機会にお邪魔しますね」と申し訳なさそうに答える。

ここからは専門家の仕事だ。これ以上はいても、きっと迷惑になるだろう。

そこで俺は一足先に部室棟に戻ることにした。

理由を言えばきっとみんなも納得してくれるはずだ。たぶん。

離れた今も、榊さんから伝わった温もりがいつまでも手の中に残っているような気がした。

次ノ七（前書き）

遅筆なりに週一更新を目標にしています。

次ノ七

新入部員の連続獲得の朗報は常盤先輩にとって歓喜に打ち震え泣き叫ぶほどのものだった。ただ実際に涙を流した訳ではないし叫んだ訳でもない。ただ、それだけの雰囲気を持っていたというだけのことだ。

後で保健室に入部届けを付けた菓子折りでも持って見舞いに行くかな、と冗談にも本気にもとれる言い方をして常盤先輩は頭をガシガシと掻いた。

現在、現時点ではかろうじて紅一点を死守している権左衛門は既に我が物顔でオカルト研究部の部室に居座っている。栄ちゃんはワクワクとした表情で辺りを見回していた。

部室に戻ってきた俺はとりあえず、常盤先輩がこれから何を始めるようにするのか、返答待ちといった所である。

「コホン、まあ、諸君。まずはオカルト研究部が無事始動出来ることを喜ぼうではないか」

「おー！」

一人がパチパチと拍手し、一人が無反応、一人がうむ、と腕組みをしながら頷く。ちなみに無反応なのは俺だ。

「我々のいる、オカルト研究部はこの妖思之高校における七不思議、その所在を実際に確かめようという部活である」

大げさな身振り手振りでどこか芝居じみた口調で先輩は続ける。

「また、それ以外にも何か怪奇現象的な事象を見つけたら、逐一報告しファイルに纏めなければならない！」

これまた面倒臭そうな内容である。

「まあ、固い話は抜きにしてそれ以外にも面白そうなことがあれば、絶賛募集中だ」

「おー！」

栄ちゃんは合いの手を入れる。

権左衛門は面白そうなことという響きが琴線に触れたようで、ニヤニヤしていた。いや、自分から面白そうなことを見つけてこい、ってことだぞ？

常盤先輩はいつの間に用意したのか、手元に紙コップを持っていた。中には何か飲み物が入っている。栄ちゃんが気を回して、俺や権左衛門に紙コップを回してくれた。

「だが、まずは結束会ということで、ここは祝いの席だ。全員に飲み物は渡ったか？」

「渡りましたー！」

嬉しそうに栄ちゃんが答える。先ほどまで幾分散らかっていたテーブルは当初よりも片付けられていた。更にポテトチップスやおせんべいなどの菓子類が載っている。

「今回、もう一名の入部者である榊くんが参加できなかったのは残念なことだが、また次の機会があるだろう。ということ、皆グラスを掲げよ！」

紙コップです、というツツコミはこういった場ではあまり空気を読めているとは言えないだろう。黒い炭酸飲料が入った紙コップをそれぞれが手に持って合図を待つ。

権左衛門はシュワシュワと泡立つ液体を興味深げに眺めていた。

「オカルト研究部結成を祝ってカンパーイ！」

紙コップの中身が零れない程度にそれぞれをぶつけ合ってから、口元に近づける。

その時、ブバーッ、と勢いよく権左衛門が液体を噴出して辺りに飛び散らせた。咄嗟の出来事だったが人にかからなかったことが幸いである。

「ううむ……ワシは炭酸というのはどうも苦手なようじゃ……」

あばー、と口から唾液ともよだれともつかない液体を零しながら権左衛門が喋る。口元をぬぐってやろうか迷っている内に常盤先輩がハンカチで拭いてやっていた。

「権左衛門くん。炭酸が駄目なら初めに言っておこうか」

「すまぬ、金成よ。炭酸水というのを口にすることがなかったもので、興味があったのじゃ」

割と素直に答える権左衛門に俺は驚いた。もしかしたら恥ずかしかつたのだろう。頬が少しだけ赤くなっていた。

「まあ、それなら仕方ねえかな。次は気をつけるんだぞ」

紙コップに新しい中身（今度は炭酸ではなくオレレンジジュースだ）を注いでから、権左衛門の頭をポンポンと掌で撫でた。その動作があくまで自然だったので、何も言うタイミングがなかった。

権左衛門は少々照れくさそうにうつむいて、鼻の辺りを人差し指でこすった。

「うむ、これならば飲めるぞ」

権左衛門はご満悦である。

「うむ……」

まだ、頬の赤みが抜けていない。

「さて、話の筋を戻そうか」

常盤先輩が本題に入ろうと話を振ってきた。

「突然だが、このオカルト研究部の活動はこの妖思之高校における七不思議の所在を確かめることだって言ったよな？」

「確かに言いましたね」

「言いましたー」

下髭を生やした男がするように顎の辺りを撫でつつ頷く俺。栄ちゃんも首を上下に振る。権左衛門はお菓子が物珍しいのか、片っぱしからちよつとずつ手を付けていた。

「この中に学校の七不思議を全部言える奴はいるか？」

「はいはい、言えまーす！」

首だけの上下運動から元気よくジャンプする上下運動に変わり、ひよっこり手を上げて栄ちゃんは必死にアピールする。

見ていて微笑ましくも思えるが、オカルトは彼のアイデンティティーなので当然ともいえる。

「よし、じゃあ言ってみろ」

「はい！ えっと、突然人が消えてしまう合わせ鏡に音楽室の笑うミケランジェロ像、理科室で突然動き出すという骸骨標本、帰り道でどこからともなくおいてけ、っていう声が聞こえるおいてけ堀、図書館でまだ読んだことのない本のネタばれをする恐怖の幽霊に、階段の何かが増える十三階段に、調理室の花子さん、です！」

……七不思議の内、幾つかはどこかで聞いたことのあるようなものだったが、似ているようで全く違う名前だったような気がする。最後の不思議は分からないのが通説だが、本校ではその全てが判明しているようだ。

「ああ、間違っちゃいないが、補足が必要なもんが幾つかあるな」

「むう、なんですか？」

栄ちゃんが疑問符を付けて先輩に話し掛ける。

「手始めに言うと、この妖思之に合わせ鏡になってるような場所はないんだ」

「あれ、じゃあいきなり七不思議が破綻してませんか？」

俺はツツコミ所を見つけたので意見を一気に押し出す。

「そうだ。だが、何人か実際に姿を消した奴もいるから、この七不思議自体は存在しているんだよ」

「……どういことですか？」

「合わせ鏡は見つかっていない、だが、人がいなくなるという現象は存在している訳だ。いうなれば神隠しみたいなもんだな。つまりは原因となることがあるってことだ。俺はそれが七不思議に隠されていると踏んでいる」

「はあ……合わせ鏡でなく、七不思議でなくても学校をサボってるとか、風邪をひいて休んでるってことはないんですか？」

「だったら、いいんだがな。先生方に聞きに行っても言葉を濁して教えてくれないんだわ」

「何か生徒に知られたくない訳があると……？」

一気に話がきな臭くなってくる。

「でも本当に消えてしまったなら、もっと事件になってなければおかしくないですか？」

と、栄ちゃん。

「内々だけで済ませたい事情ってのもあるのかなあ、やっぱり。今は少子化の波もあってどこの学校も生徒を確保するため、必死になって四苦八苦してるとか聞くしな。少なくとも問題が露見すると来年とかに影響があるってことじゃねえの？　だから、諸事情で転校したってことにされてる奴もいる。まあ、今のところ、忽然と消えたってのはあんまり真面目じゃない不良ばかりだって聞くから、親の方もどっかをほつつき歩いて家出をしてるとか考えてるのかもな。その内、戻ってくるんだらうって、暢気なもんさ」

「それでも常盤先輩は随分と詳しいみたいです。どうやって調べたんですか？　シンプルに聞き込みですか？」

「ふん、独自の情報網ってのがあるのさ」

左の人差し指を立てて自らの額をトントンと叩きながら、先輩は自信を持った態度で言う。

「まあ、お前らも成長してきたら教えてやるよ。まあ、当面は合わせ鏡が怪しいから、その調査が部の活動になる、そのための装備は各自ちゃんと用意しておけよ？」

何を用意すればいいのかを、具体的には言わなかった。多分、新入部員のお手並み拝見ということとで試しているのだろう。正直な所、何かを用意する気にはならなかったが、先輩にバレた時が怖いからある程度それらしいものは用意しておくとするか……。

その日のプチ宴会は放課後から夜の閉門時間ギリギリまで続いた。

次ノ八（前書き）

遅筆なりに週一更新を目標にしています。

次ノ八

学校での宴会が終わり、俺と栄ちゃんと権左衛門は帰りの路地に立っていた。

権左衛門が先導し、その後ろを俺と栄ちゃんがトボトボと歩いているという構図だ。

「なあ、栄ちゃん」

「んー？ どしたの、修治くん」

キョトンとした表情で、こちらを向く栄ちゃん。俺は普段の仏頂面から、めったにしない笑顔を向けたまま、両握り拳を彼のこめかみに押し当てる。そして、グリグリと力を入れた。

「今日の、ア、レはどういうことだったのかなあ？」

半ば、尋問じみた形で栄ちゃんを問いたです。

「うう、ごめんー。でも、あんな風にでもない」と修治くん、オカルト研究部に入ってくれないかなーって……イテテテ」

目尻にうっすらと涙を浮かべつつ、懇願するようにして俺の方を見つめてくる。

泣き落としに引っかかる気はないが、少しだけ問い詰める行為に對して気が咎めた。

「ちゃんと教えてくれたら普通にオカルト研究部に入ろうか考えないでもなかったんだぞー？」

ぐりぐり。

「嘘じゃな。修治に限ってはそんなことはないであろう」

「……何で、俺のことをよく知りもせずになんか言えるんだ？」

栄ちゃんのこめかみに握り拳を押し当てたまま、権左衛門に問う。

「しばらく接しておれば、誰でも分かる。ほんの少しばかり、修治は些事にこだわり過ぎる嫌いがあることはな」

「何だと？」

「修治が気にしていることは戯言も良い所。他愛もない。その癖に、

ここ一番では妥協し、すぐ諦めておる。諦めたことの中に重要なことがあった可能性もあるのじゃぞ？」

権左衛門の言葉は少々耳が痛い。だがコイツには俺が知りえない、長い年月を生きてきた過去がある。文句を言うことは出来ても邪険には出来なかった。

「お主が知らぬ所でも世界は動き、絶えず変化し続けておるのじゃ。追いつき追い抜こうとした所でそれはおいそれとは適わぬ。流れに身を任せるというのも、また一つの選択であるのじゃ、修治」

「それは自分の意見、我を通すなってことか？」

「そうは言っておらぬ。物ごとに対し、偏った見方をし過ぎるなどいう意味じゃ」

権左衛門は諭すようにして、更に続ける。

「理解出来ぬことを理解しようとするのは苦しい。ただありのままを受け入れるのじゃ。怪思之はお主が思っている以上に怪異に満ちておるのだぞ？ ……人間とは実にくだらぬ存在よ、ワシらの同胞が身近にいることに気づきもしないのだからな」

「おい、それ、どういうことだよ！」

権左衛門は答えなかった。

「うう……」

いかん、権左衛門と言い合ってたら栄ちゃんのことをすっかり忘れていた。慌てて両手の枷から外してやる。涙ぐみながら、こめかみに当てられるげんこつに耐えていた栄ちゃんはようやく痛みから解放されてホッとした表情を浮かべる。

「修治くん、ごめんね」

ありのままを受け入れる生き方ってのは、どんな生き方なのだろう。今は想像もつかない。

ただ、栄ちゃんの謝罪を受け入れる間に心のわだかまりは溶けてどこかへ消えていった。

道の途中で、また明日ー、と声を掛けて栄ちゃんと別れた。

途中までは意気揚々としていた権左衛門だったが、俺に考えを教

示してから終始無言になった。どうしたら良いか分からず、その苦い空気は帰宅するまで続いた。

「権左衛門ちゃん、修治もお帰りなさい」

キッチンまで行くと、母さんが俺たちに声をかける。

「ただいま」

「うむ」

それぞれの返事をして手荷物を置きに二階に上がろうとする。

「二人とも手洗いとうがいをしてきて。そしたらご飯にするわよ」
「了解」

学校でのプチ宴会は量はあったといってもあくまで軽食程度だったので、夕食の食欲に支障が出るほどのものではなかった。家路までの間に腹が膨れていた感覚はほとんど無くなっていた。

「そういえば帰り道のアレ、どういうことだ？ 同胞がなんたら、とかいうの」

手荷物を下ろしつつ、俺はあらためて聞いてみることにする。

「む、ワシそんなこと言ったかの？」

権左衛門はとぼけていた。敢えてなのか本気で忘れているのか判別がつかない。

「ワザと……か？」

「そんなことをしてもワシに利点などないであろうが」

当たり前のこととはいえ、権左衛門の言葉を素直に受け入れるには俺の思考は少々複雑に出来ていた。言葉を鵜呑みにはせず、どうしても歪めて捉えてしまう。

間違ったことなのかも知れないが、少なくとも自身のありのままの姿だと言えた。

「まあ、明日にでも教えてやろう。今日の所は忘れるのが身のためじゃぞ」

「それは脅しか？」

「戯け、人間如きにそんな殺伐としたもの使う意味がないわ。気を

張るな、ただワシも少し思う所があるから時間が欲しいのじゃ」

そうやって権左衛門はカカカ、と笑った。これ以上は権左衛門から情報を引き出すことは出来そうになかった。

何を考えているのか分からない。だから、心を許せない。

漠然としたものだったが、俺の中でその意識が覆されることはなかった。

「権左衛門ちゃん。今日、初めての学校はどうだったの？」

興味津々といった様子で母さんは契約者である猫神に訊ねる。もう外に出掛けることはないので、俺と権左衛門はどちらも寝巻き姿である。

「うむ、まあまあといったところかの。思っていた以上に関心を惹くものが幾つかあったからの」

「あら、それは何なのかしら。是非に教えてほしいわ」

ゴマをすっているのか、はたまた媚を売っているのか、あるいは敬意を表しているのか。どうとも捉えようのある態度を取りながら、母さんは先を促す。我が親ながら、こうまであからさまな姿を見せられると何かが悲しくなってくる。

「まずはな、学校の七不思議というのがあってな――」

権左衛門はテーブルに載った料理をさも美味そうに咀嚼しつつ、楽しみに語り出した。

その日の夕食は権左衛門に合わせたのか、焼いた鰯を主食にイカの塩辛や数の子といった海産物が多くを占めていた。

「今日、スーパールの特売日だったのよね。美味しい物食べたいからって私、頑張っちゃった！」

「母さん、お疲れ様」

「理沙よ、でかしたぞ」

「そう言ってもらえると嬉しいわ」

にこやかにはにかんで、母さんはエッヘン、と胸を張る。俺と比

べてアクティブな性格には素直に頭が下がる。

数年間、俺と母さんは二人きりで暮らしている。単身赴任で家を離れている親父が不在な分、母さんは一人で頑張ってくれた。

子供はどんなに自由奔放であると言っても勝手に育つ訳ではない。俺を一人前に育てるまでに相当苦労したはずだ。今が一人前なのかと聞かれれば、閉口して無言で頭を下げたくなる思いではあるが。

「まだまだたくさん買ったから、明日の分も明後日の分も明日明後日も含めて一杯あるわよ〜」

やり過ぎな時もたびたび見受けられる訳だったりするのだが。

権左衛門は猫だけあって、好物の魚類が食べられるとあって大満足な様子だった。

魚は嫌いではない。

嫌いではなく、むしろ好きな部類には入るのだが、これから毎日のように同じ魚料理が続くことを考えると気分がげんなりするのを止められなかった。

母さんの欠点はたまの忘れっぽさと衝動買いとまとめ買いであるように思う。

「たまに、魚以外もお願いね……」

精一杯のあがきを見せるも、大した成果は上げられそうになかった。

食事がちょうど終わり、皿を片付けている頃、電話のベルが鳴ったため、母さんが電話台に向かった。電話が鳴る時間としては遅いように感じた。

食器を洗い終わり、権左衛門とともに二階に上がることを伝えると、母さんはひらひらと手を振る動作で頷きを返した。

「のう、修治よ。押入れの具合はどうじゃ？」

「嫌みのつもりか？　なら、残念だったな。布団はふわふわしてるし暑すぎず寒すぎず、割と快適だぞ」

「ふむ、そうか。ワシがあてがった訳じゃから感謝するのじゃぞ？」

押入れの中に興味を持たせてベッドと交換を持ちかけるつもりだったが、権左衛門の返事はそっけなく効果はほとんど皆無に近かった。

ちいっ、狭いよ。暗いよ。寂しいよ。怖いよ……。最後は大げさである。

間章（前書き）

遅筆なりに週一更新を目標にしています。

間章

その日、日向葵は帰りが遅くなってしまった。

図書館で調べ物をしていて気がつけば夕暮れ、窓から光は刺さなくなっていた。慌てて帰り支度をし校門まで来たのだが、不幸にも自分が教室に忘れ物をしたことに気づいてしまった。

教室までの道筋にある廊下の明かりをつけようかとも思ったが、見回りの教師にばったり出くわしたら、こっぴどくしかられてしまうかも知れない。一度きりだが、以前、帰りが遅くなった時に凄まじい勢いで怒られたことがあったため、出来ればそんなことはごめんこうむりたかった。

しかし、彼女は暗所自体があまり得意ではなかった。

暗闇には何故だか、何かが潜んでいるような気がして、どうしても怖かった。

忘れたのはそこまで必要なものでもなかったから、一度、別の紙にでも書いておいて、明日改めて忘れ物を回収して書き直す、でも良かったのではないか。そうしなかった自分の選択に後悔する。

だが、ここまで来たら、最後までやるしかない。

視界が狭くなれば、どういう訳か他の五感が鋭敏になる。自分の足音だけが耳に印象的に残り、ビクリとするが、それ以外に音がないうちに安堵する。

足音が余計に聞こえるという訳でもない。大丈夫、大丈夫。

今、ここにいるのは自分一人だけだ。良くも悪くも孤独に勇気づけられるというのはおかしな話だが、彼女は少なくとも勇気づけられていた。

教室の扉は閉まっていたので、大きな音が出ないようにそうっと開ける。

それでもガラガラと嫌な音を立てる。聞き耳を立てるように、彼女は周囲を窺った。

よし、問題なし。見回りの先生もいないようだし、ここまでくれば、後は机の中を探って忘れ物を取り出すだけだ。整理は普段からある程度行っていたので、探し物はすぐに見つかった。

見つけるものは見つけたし、長居は無用だった。

一刻も早く、この場から立ち去りたい。

タタタタタ……

駆け足で、脇目も振らずに薄闇の中へ踏み出していく。

「痛ッ」

明かりも点けず、足元が良く見えない中を走ったため、自分の足に躓いて転んでしまった。

「はは……ドジだな、あたし」

誰が見てる訳でないが、スカートの裾の乱れを気にしてポンポンと埃を払って直す。

「……あれ？」

何故だろう、誰もいないはず……。なのに誰かに見られていたような、そんな気配を感じる。

おかしい。

こんな時間に学校にいるのは職員室で残業をしている先生か、あるいは見回りの先生、懐中電灯の明かりもないから、おそらくは誰もいないはずだ。

気味の悪さがつま先から全身に広がって背筋がうすら寒くなった。

「ひっ」

すぐ隣に誰かの視線を感じた気がして、身がすくめて恐る恐る見やる。

「――なんだ……鏡か」

ホッと安心した反動で息を吐く。こんなことで一喜一憂して馬鹿みたいだ。

しかし、ふと、先ほどまでとは別の恐怖が唐突に湧き上がってきた。

あれ、さっきまでこんな所に鏡なんてあっただろうか。

自身の虚像が浮かぶ鏡を前にして、悪夢に取り込まれてしまったような妙な気分になる。目を逸らしたくても逸らせなかった。

もし、少しでも目を離したらその間に鏡の向こうの私が、私の首を掴んで絞め殺そうとするのではないか、そんなあるはずもない妄想が恐怖を煽り立てる。

馬鹿だな、そんなこと考えたら、余計に怖くなっちゃうじゃない……。

自分の下らない妄想を乾いた笑いで無理やり誤魔化して、目を離そうとした時。

”鏡の中にいる私が不気味に微笑んだ気がした……”

次の瞬間、日向葵の姿はそこになかった。

次ノ九（前書き）

遅筆なりに週一更新を目標にしています。

次ノ九

「ふぁあゝゝう」

大あくびをして、目を覚ます。腹減ったな……。飽きもせず同じ感情を浮かべてむくりと起き上がる。

押入れの中で目を覚ますというのも、初めは違和感があったのだが今は当然のように受け入れている自分に気がつく。少しだけ悲しくなった。

この現状を作り出した当人、権左衛門はというと涎を垂らしつつ、だらしなく足を広げて寝ている。蒲団が乱れて下に転がっていた。健全な青少年には僅かながら、目の毒になる部分もあったので、慌てて視線を逸らし、なんだか腹が立ったので近くに落っこちていた枕を投げつけた。

「ゲフツ」

悶絶する権左衛門、俺は勝利の愉悦に酔いしれながら、部屋を後にする。

「ぐおっ」

背後からの反撃に俺は対処出来ず、前につんのめった。

……畜生、まだ敵わないか。

「まだまだじゃな」

ニヤリと不敵に微笑む権左衛門。後頭部を押さえながら、俺は同じように底意地悪く笑い、無言のまま再戦の誓いをする。

俺たちの戦いはまだこれからも続くぜ！ 悪いが打ち切りENDは望んじやいない。

「あー、無駄な運動したら腹が……」

早く一階に降りよう。空腹感が鈍痛のように押し寄せてくる。

「おはよう、修治。魚あるわよー」

……そうだった。昨日の夕飯から海産づくしになることは既に約束されていたではないか。新鮮な食材は良い、何と言っても活きの

良さが違う。

一たび口にすれば、その味の虜となり決して忘れることなく、美味しく生まれた魚への想いを馳せることにした。

魚よ、俺たちに食されるために生まれた訳ではないことは分かっている。だが、人も食べなければ生きていけないんだ。捕まるために生まれた訳ではないことも分かる。

よくぞ生まれてきてくれた。俺は決して感謝の気持ちを忘れない。世界には満足に物を食べられない人もたくさんいる、そのことを考えれば、今の俺の境遇はとて有り難いこと、実に尊いことなのだ。

そうやって心に言い聞かせて、食事の新鮮さと海産物の鮮度とを置換し、幸せの表情を浮かべる。

「お腹空いてたから、嬉しいよ。母さん」

「あら、じゃあいっぱい食べてね。お弁当も美味しいお魚よ〜」
「あ、そう……」

うん、確かに海産物は美味しかった。きちんと味付けもされて、日本人の口に合うべく食べやすく、更に健康面まで考えられた完全調和の旋律。^{ハイモニー}

素晴らしい。ただ、調理法が昨日までとまるっきり同じという点を除けば、それは完璧な朝食だと言えた。

母さんの欠点と言えるもののひとつが調理の際、衝動買いとまとめ買いの弊害によるレパートリーの極端さである。

料理が下手な訳でも、苦手な訳でもない。ただ、どういうことか母さんは安く商品が売っていると、まとめ買いをし、しばし、メニューが〇〇ずくし、といった様子になるのだ。

手を抜いているのではなく、作る料理は文句なしに美味しい。贅沢な悩みに思われるだろうが、現実に経験してみるとそれはよく分かる。

安かったからと言って、大量のじゃが芋と白菜を買ってきた時なんかはエンドレスでポテトサラダと白菜の味噌汁だった。しかも、

月間特売で更に買い足すものだから、そのエンドレス現象は一月近く続いたのだ。

カレーなどなら、具材を変更したりして、何とかなるのかもしれないが同じ味がずっと続くのは、ある意味で拷問に等しいものがある。ただ、この同じ料理が続くものにも周期があり、今回の海産物群の周期が終われば、しばらくの間は平均的でバランスの良い食事が続くだろうという、そんな淡い期待だけが救いを与えてくれる。

しかし、まあ、今はまだ飽きが来ている訳ではなく、これから先の未来を示唆して勝手に落ち込んでいるだけのことなのだが。

今度、頑張って早起きでもして、母さんの代わりに朝食だけでも作ろうか。

俺もレシピが多い訳ではないから品数は少なくなるだろうが、それでも、ループする料理を止めることは出来るだろう。

よし、と俺はグツと拳を固め、決意を胸に心を新たにした。

「美味であったのう」

満足げな表情を浮かべて、お腹をポンポンとさすりながら権左衛門は学園への登校路を進んでいる。爪楊枝を加えていない分、おっさん臭さが無いのが救いである。

「……ええ、そうですね」

「フッフフフーン♪」

栄ちゃんは鼻歌まじりに恍惚とした幸せそうな表情を浮かべて、道筋を共に歩く。何かいいことでもあったのだろうか。

「どうしたんだよ、栄ちゃん。鼻歌なんか歌って」

「えー？　だって、あの猫神様と一緒に学園に通ってるんだよー？　それに、修治くんもオカルト研究部に入ってくれたし」

「ああ、そう」

割とどうでもいいことで、栄ちゃんは幸せになれるらしい。実に羨ましいことだ。

「それはそうと、今日の教室の雰囲気、なんか暗くないか……？」
教室に辿り着くと、どうも1－Aクラス内の様子に形容しがたい違和感を覚えた。

「なんか知ってるか？」

栄ちゃんは首を横に振ったので、射手矢に野次馬根性を出して聞いてみる。

「ああ、修治もなんとなく感じたんだね。どうやら、この1－Aの女子生徒が一人行方不明になったみたいなんだよ」
すると、訳知り顔ですぐに答えてくれる。

「そういえば夜に電話が掛かってきた気がしたが、親が出たな」

「多分、それだね」

更に詳しく聞いてみるとどうやら、クラスの女子の一人が昨日から家に帰っていないのだそうだ。

女子の名前は日向葵。ひなたあおい 屈託のない明るい笑顔をする可愛らしい女の子だったという。

話したことはなかったが、俺もどんな印象の女の子だったかはなんとなく思い出せる。少しだけ、榊さんと雰囲気似ているように思った彼女だ。急に家出をするような雰囲気の女の子ではなかったように思う。

どんなタイプの人間が家出をするかは知識にないため、その印象は間違っているのかも知れなかったが。

そういえば、今日は榊さんの姿を見ていない。この一件とは関係がないと思うが、学校に来ていないのだろうか。

赤松教諭のHRも出だしからそんな物騒な話になった。新任早々事件に巻き込まれて不憫なことだ。

当たり前とは当たり前だが、消えた日向さんのことを心配しているようだった。

「その、クラスメイトの葵さんがどうして帰っていないのかを調べ

てみようってことか？」

休み時間に入って、射手矢や栄ちゃんと話をしていると携帯にメールが届く。グループリストとして登録されたメンバーに一括送信したということらしく栄ちゃんと顔を見合わせた。つまりはオカルト研究部の常盤先輩からのメールだ。

権左衛門は携帯電話を持っていないため、その場で説明をした。ちなみに榊さんに声を掛けようと思ったところ、姿がなかった。

どうやって、情報を聞きつけたか知らないが常盤先輩が日向葵さんが昨日の夜から帰宅していないことと学園に来ていないことを知っていた。

最後にはどうにかして情報を得ろよ、と半ば強制的な言伝^{ことづいて}で締めくくられていた。

面倒ではあるが、仕方ないか。どうにも役得とは正反対の損な役回りだ。

何はともあれ、突如人が消える原因に興味がない、と言えは嘘になる。

既に何人も消えているはずで警察沙汰になってもおかしくはないのに、ちらほらと噂が上がる程度で学校内ではおおよけにはされないこと。何らかの圧力があるのだろうか。その事実（おそらく混乱を避けるためだろう）に少なからず危険な雰囲気を感じた訳だが、好奇心には勝てなかった。

次ノ九（後書き）

次回更新は少し遅くなるかも知れません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3949a/>

猫神

2011年11月16日03時26分発行